

# 偷盜

芥川龍之介

青空文庫



「おばば、猪熊のおばば。」

朱雀綾小路の辻で、じみな紺の水干に揉烏帽子をかけた、二十ばかりの、醜い、片目の侍が、平骨の扇を上げて、通りかかりの老婆を呼びとめた。――

むし暑く夏霞のたなびいた空が、息をひそめたように、家々の上をおおいかぶさつた、七月のある日ざかりである。男の足をとめた辻には、枝のまばらな、ひよろ長い葉柳が一本、このごろはやる疫病にでもかかつたかと思う姿で、形ばかりの影を地の上に落としているが、ここにさえ、その日にかわいた葉を動かそうという風はない。まして、日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせいか、人通りも今はひとしきりとだえて、たださつき通つた牛車のわだちが長々とうねつていてるばかり、その車の輪にひかれた、小さな蛇も、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をぴくぴくやつていたが、いつか脂ぎった腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないようになつてしまつた。どこもかしこも、炎天のほこりを浴びたこの町の辻で、わずかに一滴の湿りを点じたものがあると

すれば、それはこの蛇の切れ口から出た、なまぐさい腐れ水ばかりであろう。

「おばば。」

「……」

老婆は、あわただしくふり返つた。見ると、年は六十ばかりであろう。垢じみた檜皮色の帽子に、黄ばんだ髪の毛をたらして、尻の切れた藁草履をひきずりながら、長い蛙股の杖をついた、目の丸い、口の大きな、どこか囁きの顔を思わせる、卑しげな女である。

「おや、太郎さんか。」

日の光にむせるような声で、こう言うと、老婆は、杖をひきずりながら、二足三足あとへ帰つて、まず口を切る前に、上くちびるをべろりとなめて見せた。

「何か用でもおありか。」

「いや、別に用じやない。」

片目は、うすいあばたのある顔に、しいて作つたらしい微笑をうかべながら、どこか無理のある声で、快活にこう言つた。

「ただ、沙金しゃきんがこのごろは、どこにいるかと思つてな。」

「用のあるは、いつも娘ばかりさね。鳶が鷹を生んだおかげには。」

「猪熊のばばは、いやみらしく、くちびるをそらせながら、にやついた。

「用と言うほどの用じやないが、今夜の手はずも、まだ聞かないからな。」

「なに、手はずに変わりがあるものかね。集まるのは羅生門、刻限は亥の上刻——みんな昔から、きまつてているとおりさ。」

老婆は、こう言つて、わるがしこうに、じろじろ、左右をみまわしたが、人通りのないのに安心したのかまた、厚いくちびるをちよいとなめて、

「家内の様子は、たいてい娘が探つて來たそうだよ。それも、侍たちの中には、手のきくやつがいるまいという事さ。詳しい話は、今夜娘がするだろうがね。」

これを聞くと、太郎と言われた男は、日をよけた黄紙の扇の下で、あざけるように、口をゆがめた。

「じや沙金しゃきんはまた、たれがあすこの侍とでも、懇意になつたのだな。」

「なに、やつぱり販婦ひさぎめか何かになつて、行つたらしいよ。」

「なんになつて行つたつて、あいつの事だ。當てになるものか。」

「お前さんは、相変わらずうたぐり深いね。だから、娘にきらわれるのさ。やきもちにも、

ほどがあるよ。」

老婆は、鼻の先で笑いながら、杖<sup>つえ</sup>を上げて、道ばたの蛇<sup>ながむし</sup>の死骸<sup>しがい</sup>を突つついた。いつのまにかたかつっていた青<sup>あお</sup>蠅<sup>おばえ</sup>が、むらむらと立つたかと思うと、また元のように止まつてしまふ。

「そんな事じや、しつかりしないと、次郎さんに取られてしまうよ。取られてもいいが、どうせそうなれば、ただじやすまないからね。おじいさんでさえ、それじや時々、目の色を変えるんだから、お前さんならなおさらだらうじやないか。」

「わかつているわな。」

相手は、顔をしかめながら、いまいましそうに、柳の根へつばを吐いた。

「それがなかなか、わからないんだよ。今でこそお前さんだつて、そうやつて、すましているが、娘とおじいさんとの仲をかぎつけた時には、まるで、気がふれたようだつたじやないか。おじいさんだつて、そうさ、あれで、もう少し気が強かろうものなら、すぐにお前さんと刃物<sup>はもの</sup>三昧<sup>さんまい</sup>だわね。」

「そりやもう一年前<sup>まえ</sup>の事だ。」

「何年前<sup>まえ</sup>でも、同じ事だよ。一度した事は、三度するつて言うじやないか。三度だけなら、

まだいいほうさ。わたしなんぞは、この年まで、同じばかを、何度したか、わかりやしないよ。」

こう言つて、老婆は、まばらな歯を出して、笑つた。

「冗談じやない。——それより、今夜の相手は、曲がりなりにも、とうほうがん藤判官とうばんだ、手くぱりはもうついたのか。」

太郎は、日にやけた顔に、いらだたしい色を浮かべながら、話頭を転じた。おりから、雲の峰が一つ、太陽の道に当たつたのであろう。あたりがゆうぜん然と、暗くなつた。その中に、ただ、蛇の死骸ながむしだけが、前よりもいつそう腹あぶらの脂を、ぎらつかせているのが見える。「なんの、藤判官だといつて、高が青侍の四人や五人、わたしだつて、昔とつたきねづかさ。」

「ふん、おばばは、えらい勢いだな。そうして、こつちの人数はにんす？」

「いふものとおり、男が二十三人。それにわたしと娘だけさ。あーぎ阿濃は、あのからだだから、朱雀門すざくもんに待つていて、もらう事にしようよ。」

「そう言えば、阿濃も、かれこれ臨月りんげつだつたな。」

太郎はまた、あざけるように口をゆがめた。それとほとんど同時に、雲の影が消えて、

往来はたちまち、元のように、目が痛むほど、明るくなる。——猪熊のばばも、腰をそらせて、ひとしきり 東鴉の あさまがらす ような笑い声を立てた。

「あの阿呆をね。たれがまあ手をつけたんだか——もつとも、阿濃は次郎さんに、執心あこぎ だつたが、まさかあの人でもなかろうよ。」

「親のせんぎはともかく、あのからだじや何かにつけて不便だろう。」

「そりや、どうにでもしかたはあるのだけれど、あれが不承知なのだから、困るわね。おかげで、仲間の者へ沙汰さたをするのも、わたし一人とていう始末さ。眞木島まきのしま の十郎、関山せきやま の平六、高市たけち の多襄丸たじょうまる ど、まだこれから、三軒まわらなくつちや——おや、そう言えば、油を売っているうちに、もうかれこれ未ひつじ になる。お前さんも、もうわたしのおしゃべりには、聞き飽きたろう。」

蛙かえる 股また の杖つえ は、こういうことばと共に動いた。

「が、沙金しゃきん は？」

この時、太郎のくちびるは、目に見えぬほど、かすかにひきつった。が、老婆は、これに気がつかなかつたらしい。

「おおかた、きようあたりは、猪熊のわたしの家うち で、昼寝でもしてゐるだらうよ。きのう

までは、家うちにいなかつたがね。」

片目は、じつと老婆を見た。そうして、それから、静かな声で、  
「じゃ、いざれまた、日が暮れてから、会おう。」

「あいさ。それまでは、お前さんも、ゆつくり昼寝でもする事だよ。」

猪いのくま熊いのくまのばばは、口達者に答えながら、杖つえをひいて、歩きだした。綾あや小路のこうじを東ひがしへ、猿さるのような帷子姿かたびらすがたが、藁草履わらぞうりの尻しりにほこりをあげて、日ざしにも恐れず、歩いてゆく。  
——それを見送つた侍は、汗のにじんだ額に、険しい色を動かしながら、もう一度、柳の根につばを吐くと、それからおもむろに、くびすをめぐらした。

二人の別れたあとには、例の蛇の死骸ながむじしがいにたかつた青蠅あおばえが、相変わらず日の光の中に、かすかな羽音を伝えながら、立つかと思うと、止まつている。……

## 一一

猪熊のばばは、黄ばんだ髪の根に、じつとりと汗をにじませながら、足にかかる夏のほ  
こりも払わずに、杖をつきつき歩いてゆく。——

通い慣れた道ではあるが、自分が若かつた昔にくらべれば、どこもかしこも、うそのような変わり方である。自分が、まだ台盤所の婢女をしていたころの事を思えば、——いや、思いがけない身分ちがいの男に、いどまれて、とうとう沙金を生んだころの事を思えば、今の都は、名ばかりで、そのころのおもかげはほとんどない。昔は、牛車の行きかいのしげかつた道も、今はいたずらにあざみの花が、さびしく日だまりに、咲いているばかり、倒れかかつた板垣の中には、無花果が青い実をつけて、人を恐れない鴉の群れは、昼も水のない池につどっている。そうして、自分もいつか、髪が白みしわがよつて、ついには腰のまがるような、老いの身になってしまった。都も昔の都でなければ、自分も昔の自分でない。

その上、貌も変われば、心も変わつた。始めて娘と今の夫との関係を知つた時、自分は、泣いて騒いだ覚えがある。が、こうなつて見れば、それも、当たりまえの事としか思われない。盗みをする事も、人を殺す事も、慣れれば、家業と同じである。言わば京の大路小路に、雑草がはえたように、自分の心も、もうすさんだ事を、苦にしないほど、すさんでしまつた。が、一方から見ればまた、すべてが変わつたようで、変わつていない。娘の今している事と、自分の昔した事とは、存外似よつたところがある。あの太郎と次郎とにし

ても、やはり今の夫の若かつたころと、やる事にたいした変わりはない。こうして人間は、いつまでも同じ事を繰り返してゆくのであろう。そう思えば、都も昔の都なら、自分も昔の自分である。……

猪熊のばばの心の中には、こういう考えが、漠然とながら、浮かんで來た。そのさびしい心もちに、つまされたのであろう、丸い目がやさしくなつて、藁のような顔の肉が、いつのまにか、ゆるんで來る。——と、また急に、老婆は、生き生きと、しわだらけの顔をにやつかせて、蛙股の杖のはこびを、前よりも急がせ始めた。

それも、そのはずである。四五間先に、道とすすき原とを（これも、元はたれかの広庭であつたのかもしれない。）隔てる、くずれかかつた築土があつて、その中に、盛りをすぎた合歛の木が二三本、こけの色の日に焼けた瓦の上に、ほほけた、赤い花をたらしてゐる。それを空に、枯れ竹の柱を四すみへ立てて、古むしろの壁を下げた、怪しげな小屋が一つ、しょんぼりとかけてある。——場所と言い、様子と言い、中には、こじきでも住んでいるらしい。

別して、老婆の目をひいたのは、その小屋の前に、腕を組んでたたずんだ、十七八の若侍で、これは、朽ち葉色の水干に黒鞘の太刀を横たえたのが、どういうわけか、しさい

らしく、小屋の中をのぞいている。そのういういしい眉のあたりから、まだ子供らしさのぬけない頬のやつれが、一目で老婆に、そのたれという事を知らせてくれた。

「何をしているのだえ。次郎さん。」

猪熊のばばは、そのそばへ歩みよると、蛙股の杖を止めて、あごをしゃくりながら、呼びかけた。

相手は、驚いて、ふり返つたが、つくるも髪の、蓑の面の、厚いくちびるをなめる舌を見ると、白い歯を見せて微笑しながら、黙つて、小屋の中を指さした。

小屋の中には、破れ畳を一枚、じかに地面へ敷いた上に、四十格好の小柄な女が、石を枕にして、横になつてゐる。それも、肌をおおうものは、腰のあたりにかけてある、麻の汗衫一つぎりで、ほとんど裸と変わりがない。見ると、その胸や腹は、指で押しても、血膿にまじつた、水がどろりと流れそうに、黄いろくなめらかに、むくんでいる。ことに、むしろの裂け目から、天日のさしこんだ所で見ると、わきの下や首のつけ根に、ちようど腐つた杏のような、どす黒い斑があつて、そこからなんとも言いようのない、異様な臭氣が、もれるらしい。

枕もとには、縁の欠けた土器がたつた一つ（底に飯粒がへばりついているところを見

ると、元は粥かゆでも入れたものであろう。）捨てたように置いてあつて、たれがしたいたずらか、その中に五つ六つ、泥どろだらけの石ころが行儀よく積んである。しかも、そのまん中に、花も葉もひからびた、合歓ねむを一枝立てたのは、おおかた高たか坏つきへ添える色紙しきしの、心こころ葉はをまねたものであろう。

それを見ると、氣丈な猪熊いのくまのばばも、さすがに顔をしかめて、あとへさがつた。そうして、その刹那せつなに、突然さつきの蛇ながの死骸むしを思い浮かべた。

「なんだえ。これは。疫病えやみにかかっている人じやないか。」

「そうさ。とてもいけないというので、どこかこの近所の家うちで、捨てたのだろう。これじや、どこでも持てあつかうよ。」

次郎はまた、白い歯を見せて、微笑した。

「それを、お前さんはまた、なんだつて、見てなんぞいるのさ。」

「なに、今ここを通りかかつたら、野ら犬えじきが二三匹、いい餌食えじきを見つけた氣で、食いそうにしていたから、石をぶつけて、追い払つてやつたところさ。わたしが来なかつたら、今ごろはもう、腕うでの一つも食われてしまつたかもしれない。」

老婆は、蛙かえる股またの杖つえにあごをのせて、もう一度しみじみ、女のからだを見た。さつき、

犬が食いかかつたというのは、これであろう。—— 破れ畳の上から、往来の砂の中へ、斜めにのばした二の腕には、水氣すいきを持った、土け色の皮膚に、鋭い歯の跡が三つ四つ、紫がかつて残つてゐる。が、女は、じつと目をつぶつたなり、息さえ通かよつてゐるかどうかわからぬ。老婆は、再び、はげしい嫌惡けんおの感に、面おもてを打たれるような心もちがした。

「いつたい、生きているのかえ。それとも、死んでいるのかえ。」

「どうだかね。」

「氣らくだよ、この人は。死んだものなら、犬が食つたつて、いいじゃないか。」

老婆は、こう言うと、蛙股かえるまたの杖つえをのべて、遠くから、ぐいと女の頭を突いてみた。頭はまくらの石をはずれて、砂に髪をひきながら、たわいなく畳の上へぐたりとなる。が、病人は、依然として、目をつぶつたまま、顔の筋肉一つ動かさない。

「そんな事をしたつて、だめだよ。さつきなんぞは、犬に食いつかれてさえ、やつぱりじつとしていたんだから。」

「それじや、死んでいるのさ。」

次郎は、三たび白い歯を見せて、笑つた。

「死んでいたつて、犬に食わせるのは、ひどいやね。」

「何がひどいものかね。死んでしまえば、犬に食われたって、痛くはなしさ。」

老婆は、杖つえの上でのび上がりながら、ぎょろり目を大きくして、あざわらうように、こう言つた。

「死ななくつたつて、ひくひくしているよりは、いつそ一思いに、のど笛でも犬に食いつかれたほうが、ましかもしれないわね。どうせこれじや、生きていたつて、長い事はありやせすさ。」

「だつて、人間が犬に食われるのを、黙つて見てもいられないじやないか。」

すると、猪熊いのくまのばばは、上くちびるをべろりとやつて、ふてぶてしく空うそぶいた。「そのくせ、人間が人間を殺すのは、お互に平氣で、見ているじやないか。」

「そう言えば、そうさ。」

次郎は、ちよいと髪ひんをかいて、四たび白い歯を見せながら、微笑した。そして、やさしく老婆の顔をながめながら、

「どこへ行くのだい、おばばは。」と問いかけた。

「真木島まさきのしまの十郎と、高市たけちの多襄丸たじょうまると、——ああ、そうだ。関山せきやまの平六へいろくへは、お前さんに、言づけを頼もうかね。」

こう言ううちに、猪熊のばばは、杖にすがつて、もう一足三足歩いている。

「ああ、行つてもいい。」

次郎もようやく、病人の小屋をあとにして、老婆と肩を並べながら、ぶらぶら炎天の往来を歩きだした。

「あんなものを見たんで、すつかり氣色がわるくなつてしまつたよ。」

老婆は、大仰に顔をしかめながら、

「ええと、平六の家は、お前さんも知つてゐるだろう。これをまつすぐに行つて、立り本寺の門を左へ切れると、藤判官の屋敷がある。あの一町ばかり先さ。ついでだから、屋敷のまわりでもまわつて、今夜の下見をしておおきよ。」

「なにわたしも、始めからそのつもりで、こつちへ出て來たのさ。」

「そうかえ、それはお前さんにしては、氣がきいたね。お前さんのにいさんの御面相じや、一つ間違うと、向こうにけどられそうで、下見に行つても、もらえないが、お前さんなら、大丈夫だよ。」

「かわいそうに、兄きもおばばの口にかかつちや、かなわないね。」

「なに、わたしなんぞはいちばん、あの人の事をよく言つてゐるほうさ。おじいさんなん

ぞと来たら、お前さんにも話せないような事を、言つてゐるわね。」

「それは、あの事があるからさ。」

「あつたつて、お前さんの悪口は、言わないじやないか。」

「じゃおおかた、わたしは子供扱いにされてるんだろう。」

二人は、こんな閑談をかわしながら、狭い往来をぶらぶら歩いて行つた。歩くごとに、京の町の荒廃は、いよいよ、まのあたりに開けて来る。家と家との間に、草いきれを立てゝいる蓬原、そのところどころに続いている古築土、それから、昔のまま、わずかに残つてゐる松や柳——どれを見ても、かすかに漂う死人のにおいと共に、滅びてゆくこの大きな町を、思はせないものはない。途中では、ただ一人、手に足駄をはいている、いざりのこじきに行きちがつた。——

「だが、次郎さん、お氣をつけよ。」

「娘の事じや、ずいぶんにいさんも、夢中になりかねないからね。」  
猪熊のばばは、ふと太郎の顔を思い浮かべたので、ひとり苦笑を浮かべながら、こう言つた。

が、これは、次郎の心に、思つたよりも大きな影響を与えたらしい。彼は、ひいでた眉まゆ

の間を、にわかに曇らせながら、不快らしく目を伏せた。

「そりやわたしも、氣をつけている。」

「氣をつけていてもさ。」

老婆は、いささか、相手の感情の、この急激な変化に驚きながら、例のゞとくくちびるをなめなめ、つぶやいた。

「氣をつけていてもだわね。」

「しかし、兄きの思わくは兄きの思わくで、わたしには、どうにもできないじやないか。」「そう言えば、み実もふたもなくなるがさ。実はわたしは、きのう娘に会つたのだよ。すると、きょうひつじ未の下刻に、お前さんと寺の門の前で、会う事になつていてると言うじやないか。それで、お前さんのにいさんには半月近くも、顔は合わせないようにして、いるとね、太郎さんがこんな事を知つてごらん。また、お前さん、一ひともんちやく悶着ちやくだろう。」

次郎は、老婆のび々として説くことばをさえぎるように、黙つて、いらだたしく何度もうなずいた。が、猪熊いのくまのばばは、容易に口を閉ざしそうなけしきもない。

「さつき、向こうの辻で、太郎さんに会つた時にも、わたしはよくそう言つて來たけれどね、そうなりや、わたしたちの仲間だもの、すぐに刃物はもの三昧さんまいだろうじやないか。万一小

その時のはずみで、娘にけがでもあつたら、とわたしは、ただ、それが心配なのさ。娘は、なにしろあのとおりの気質だし、太郎さんにして、一徹人いつてつじんだから、わたしは、お前さんによく頼んでおこうと思つてね。お前さんは、死人しびとが犬に食われるのさえ、見ていられないほど、やさしいんだから。」

こう言つて、老婆は、いつか自分にも起こつて來た不安を、しいて消そうとするように、わざとしわがれた声で、笑つて見せた。が、次郎は依然として、顔を暗くしながら、何か物思いにふけるように、目を伏せて歩いている。……

「大事おおごとにならなければいいが。」

猪熊いのくまのばばは、蛙かえる股またの杖つえを早めながら、この時始めて心の底で、しみじみこう、祈つたのである。

かれこれその時分の事である。楚すわえの先に蛇ながの死骸むしをひっかけた、町の子供が三四人、病人の小屋の外を通りかかると、中でもいたずらな一人が、遠くから及び腰になつて、その蛇ながを女の顔の上へほうり上げた。青く脂あぶらの浮いた腹がペたり、女の頬ほおに落ちて、それから、腐れ水にぬれた尾が、ずるずるあごの下へたれる——と思うと、子供たちは、一度にわつ

とわめきながら、おびえたように、四方へ散つた。

今まで死んだようになつていた女が、その時急に、黄いろくたるんだまぶたをあけて、腐つた卵の白味のような目を、どんより空にそらすらに据えながら、砂まぶれの指を一つびくりとやると、声とも息ともわからないものが、干割れたくちびるの奥のほうから、かすかにもれて来たからである。

### 三

猪熊のばばに別れた太郎は、時々扇で風を入れながら、日陰も選ばず、朱雀の大路を北へ、進まない歩みをはこんだ。――

日中の往来は、人通りもきわめて少ない。栗毛の馬に平文の鞍を置いてまたがつた武士が一人、鎧櫃を荷なつた調度掛けを従えながら、綾藺笠に日をよけて、悠悠と通つたあとには、ただ、せわしない燕が、白い腹をひらめかせて、時々、往来の砂をかすめるばかり、板葺、檜皮葺の屋根の向こうに、むらがつてひでり雲も、さつきから、凝然と、金銀銅鉄を熔かしたまま、小ゆるぎをするけしきはない。まして、両側に

建て続いた家々は、いずれもしんと静まり返つて、その板蔀や蒲簾の後ろでは、町じゅうの人がことごとく、死に絶えてしまつたかとさえ疑われる。――

猪熊のばばの言つたように、沙金を次郎に奪われるという恐れは、ようやく目の前に迫つて來た。あの女が、――現在養父にさえ、身を任せたあの女が、あばたのある、片目の、醜いおれを、日にこそ焼けているが目鼻立ちの整つた、若い弟に見かえるのは、もとよりなんの不思議もない。おれは、ただ、次郎が、――子供の時から、おれを慕つてくれたあの次郎が、おれの心もちを察してくれて、よしや沙金のほうから手を出してもその誘惑に乗らないだけの、慎みを持つてくれる事と、いちずに信じ切つていた。が、今になつて考えれば、それは、弟を買いかぶつた、虫のいい量見に過ぎなかつた。いや、弟を見上げすぎたというよりも、沙金のみだらな媚びのたくみを、見下げすぎた誤りだつた。ひとり次郎ばかりではない。あの女のまなざし一つで、身を滅ぼした男の数は、この炎天にひるがえる燕の数よりも、たくさんある。現にこう言うおれでさえ、ただ一度、あの女を見たばかりで、とうとう今のように、身をおとした。……

すると四條坊門の辻を、南へやる赤糸毛の女車が、静かに太郎の行く手を通りすぎる。車の中の人は見えないが、紅の裾濃に染めた、すずしの下簾が、町すじの荒涼としているだけに、ひときわ目に立つてなまめかしい。それにつき添つた牛飼いの童と雑色とは、うさんらしく太郎のほうへ目をやつたが、牛だけは、角をたれて、漆のようく黒い背を鷹揚にうねらしながら、わき見もせずに、のつそりと歩いてゆく。しかしひとりとめのない考えに沈んでいる太郎には、車の金具の、まばゆく日に光つたのが、わずかに目にはいつただけである。

彼は、しばらく足をとめて、車を通りこさせてから、また片目を地に伏せて、黙々と歩きはじめた。――

（おれが右の獄の放免をしていた時の事を思えば、今では、遠い昔のような、心もちがする。あの時のおれと今のおれとを比べれば、おれ自身にさえ、同じ人間のような気はない。あのころのおれは、三宝を敬う事も忘れなければ、王法にしたがう事も怠らなかつた。それが、今では、盗みもする。時によつては、火つけもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。ああ、昔のおれは――仲間の放免といつしよになつて、いつもの七半

を打ちながら、笑い興じていた、あの昔のおれは、今のおれの目から見ると、どのくらいしあわせだつたかわからない。

考えれば、まだきのうのように思われるが、実はもう一年前まえになつた。——あの女が、盗みの咎とがで、檢非違使の手から、右の獄ひとやへ送られる。おれがそれと、ふとした事から、牢ろう格子うこうしを隔てて、話し合うような仲になる。それから、その話が、だんだんたび重なつて、いつか互いに身の上の事まで、打ち明け始める。とうとう、しまいには、猪熊いのくまのばばや同類の盜人が、牢ろうを破つてあの女を救い出すのを、見ないふりをして、通してやつた。

その晩から、おれは何度となく、猪熊のばばの家へ出はいりをした。沙金しゃきんは、おれの行く時刻を見はからつて、あの半蔀はじとみの間から、雀色すずめいろどき時どきの往来をのぞいている。そしておれの姿が見えると、鼠鳴ねずみなきをして、はいれと言う。家中には、下衆女げすおんなの阿濃あこぎのほかに、たれもない。やがて、蔀しとみをおろす。結び燈台へ火をつける。そして、あの何置かの置の上に、折敷おしきや高たか坏つきを、所狭く置きならべて、二人ぎりの小酒盛こざかもりをする。そのあげくが、笑つたり、泣いたり、けんかをしたり、仲直りをしたり——言わば、世間並みの恋人よどうしが、するような事をして、いつでも夜を明かした。

日の暮れに来て、夜のひき明け方に帰る。——あれば、それでも一月ひとつきは続いたろう。

そのうちに、おれには沙金が猪熊のばばのつれ子である事、今では二十何人かの盜人の頭になつて、時々 洛中らくちゅうをさわがせている事、そうしてまた、日ごろは容色を売つて、傀儡くぐつ同様な暮らしをしている事——そういう事が、だんだんわかつて來た。が、それは、かえつてあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な円光をかけるばかりで、少しも卑しいなどという氣は起こさせない。無論、あの女は、時々おれに、いつそ仲間へはいれと言う。が、おれはいつも、承知しない。すると、あの女は、おれの事を 脣おくび病ようだと言つて、ばかにする。おれはよくそれで、腹を立てた。……)

「はい、はい」と馬をしかる声がする。太郎は、あわてて、道をよけた。

米俵を二俵ずつ、左右へ積んだ馬をひいて、汗衫かざみ一つの下衆げすが、三条坊門の辻つじを曲がりながら、汗もふかずに、炎天の大路おおじを南へ下つて來る。その馬の影が、黒く地面に焼きついた上を、燕つばくらが一羽、ひらり羽根を光らせて、すじかいに、空そらへ舞い上がつた。と思うと、それがまた礫つぶてを投げるようにな、落として来て、太郎の鼻の先を一文字に、向こうの板いたび庇しの下へはいる。

太郎は、歩きながら、思い出したように、はたはたと、黃紙きがみの扇を使つた。——

(そういう月日が、続くともなく続くうちに、おれは、偶然あの女と養父との関係に、気がついた。もつともおれ一人が、沙金<sup>しゃきん</sup>を自由にする男でないという事も、知つていなかつたわけではない。沙金自身さえ、関係した公卿<sup>くぎょう</sup>の名や法師の名を、何度も自慢らしくおれに話した事がある。が、おれはこう思つた。あの女の肌<sup>はだ</sup>は、おおぜいの男を知つているかもしれない。けれども、あの女の心は、おれだけが占有している。そうだ、女の操<sup>みさお</sup>は、からだにはない。——おれは、こう信じて、おれの嫉妬<sup>しつと</sup>をおさえていた。もちろんこれも、あの女から、知らず知らずおれが教わつた、考え方すぎないかもしれない。が、ともかくもそう思うと、おれの苦しい心はいくぶんか楽<sup>らく</sup>になつた。しかし、あの女と養父との関係は、それとちがう。

おれは、それを感づいた時に、なんとも言えず、不快だつた。そういう事をする親子なら、殺して飽きたらない。それを黙つて見る実の母の、猪熊<sup>いのくま</sup>のばばもまた、畜生より、無残なやつだ。こう思つたおれは、あの酔いどれのおやじの顔を見るたびに、何度も太刀<sup>たち</sup>へ手をかけたが、わからない。が、沙金はそのたびに、おれの前で、ことさら、手ひどく養父をばかにした。そうしてその見え透いた手くだがまた、不思議におれの心を鈍らせた。

「わたしはおとうさんがいやでいやでしかたがないんです」と言わわれれば、養父をにくむ気にはなつても、沙金をにくむ気には、どうしてもない。そこで、おれと養父とは、きょうがきようまで、互いににらみ合いながら、何事もなくすぎて來た。もしあのおじじにもう少し、勇氣があつたなら、——いや、おれにもう少し、勇氣があつたなら、おれたちはどうの昔、どちらか死んでいた事であろう。……）

頭を上げると、太郎はいつか二条を折れて、耳敏川みみとがわにまたがつてゐる、小さい橋にかかるつていて。水のかれた川は、細いながらも、焼き太刀やだちのよう、日を反射して、絶えてはづく葉柳はやなぎと家々との間に、かすかなせせらぎの音を立ててゐる。その川のはるか下に、黒いものが二つ三つ、鶴つるの鳥かと思うように、流れの光を乱しているのは、おおかた町の子供たちが、水でも浴びてゐるのであろう。

太郎の心には、一瞬の間、幼かつた昔の記憶が、——弟といつしよに、五条の橋の下で、鮑はえを釣つた昔の記憶が、この炎天に通う微風のよう、かなしく、なつかしく、返つて來た。が、彼も弟も、今は昔の彼らではない。

太郎は、橋を渡りながら、うすいあばたのある顔に、また険しい色をひらめかせた。——

(すると、突然ある日、そのころ築後の前司の小舎人になつていた弟が、盜人の疑いをかけられて、左の獄へ入れられたという知らせが来た。放免をしているおれには、獄中の苦しさが、たれよりもよく、わかっている。おれは、まだ筋骨のかたまらない弟の身の上を、自分の事のように、心配した。そこで、沙金に相談すると、あの女はさもわけがなさそうに、「牢を破ればいいじゃないの」と言う。かたわらにいた猪熊のばばも、しきりにそれをすすめてくれる。おれは、とうとう覚悟をきめて、沙金といつしょに、五六人の盜人を語り集めた。そうして、その夜のうちに、獄をさわがして、難なく弟を救い出した。その時、受けた傷の跡は、今でもおれの胸に残つている。が、それよりも忘れられないのは、おれがその時始めて、放免の一人を切り殺した事であった。あの男の鋭い叫び声と、それから、あの血のにおいとは、いまだにおれの記憶を離れない。こう言う今でも、おれはそれを、この蒸し暑い空気の中に、感じるような心もちがする。

その翌日から、おれと弟とは、猪熊の沙金の家で、人目を忍ぶ身になつた。一度罪を犯したからは、正直に暮らすのも、あぶない世渡りをしてゆくのも、検非違使の目には、変

わりがない。どうせ死ぬくらいなら、一日も長く生きてしよう。そう思つたおれは、とうとう沙金の言うなりになつて、弟といつしょに盜人の仲間入りをした。それからのおれは、火もつける。人も殺す。悪事という悪事で、なに一つしなかつたものはない。もちろん、それも始めは、いやいやした。が、してみると、意外にぞうさ造作がない。おれはいつのまにか、悪事を働くのが、人間の自然かもしれないと思ひだした。……)

太郎は、半ば無意識に辻つじをまがつた。辻には、石でまわりを積んだ一囲いの土饅頭どまんじゅうが、あつて、その上に石塔婆せきとうばが二本、並んで、午後の日にかつと、照りつけられている。その根元にはまた、何匹かのとかげが、煤すすのように黒いからだを、氣味悪くへばりつかせていたが、太郎の足音に驚いたのであろう、彼の影の落ちるよりも早く、一度にざわめきながら、四方へ散つた。が、太郎は、それに目をやるけしきもない。――

「おれは、悪事をつむに従つて、ますます沙金しゃきんに愛あいじやく着きを感じて來た。人を殺すのも、盜みをするのも、みんなあの女ゆえである。――現に牢ろうを破つたのさえ、次郎を助けようと思うほかに、一人の弟を見殺しにすると、沙金にわらわれるのを、おそれたからであつた。――そう思うと、なおさらおれは、何に換えて、あの女を失いたくない。

その沙金を、おれは今、肉身の弟に奪われようとしている。おれが命を賭けて助けてやつた、あの次郎に奪われようとしている。奪われようとしているのか、あるいは、もう奪われているのか、それさえも、はつきりはわからない。沙金の心を疑わなかつたおれは、あの女がほかの男をひっぱりこむのも、よくない仕事の方便として、許していた。それから、養父との関係も、あのおじじが親の威光で、何も知らないうちに、誘惑したと思えば、目をつぶつて、すごせない事はない。が、次郎との仲は、別である。

おれと弟とは、気だてが変わつてているようで、実は見かけほど、変わつていない。もつとも顔かたちは、七八年前まえの痘瘡もがさが、おれには重く、弟には軽かつたので、次郎は、生まれついた眉目みめをそのままに、うつくしい男になつたが、おれはそのために片目つぶれた、生まれもつかない不具になつた。その醜い、片目のおれが、今まで沙金の心を捕えていたとすれば、（これも、おれのうぬぼれだろうか。）それはおれの魂の力に相違ない。そして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、おれに変わりなく持つていて。しかも、弟は、たれの目にもおれよりはうつくしい。そういう次郎に、沙金が心をひかれるのは、もとより理の当然である。その上また、次郎のほうでも、おれにひきくらべて考えれば、到底の女の誘惑に、勝てようとは思われない。いや、おれは、始終おれの醜い顔を恥じている。

そうして、たいていの情事には、おのずからひかえ目になつてゐる。それでさえ、沙金には、気違ひのよう、恋をした。まして、自分の美しさを知つてゐる次郎が、どうして、あの女の見せる媚びを、返さずにいられよう。――

こう思えば、次郎と沙金とが、近づくようになるのは、無理もない。が、無理がないだけ、それだけ、おれには苦痛である。弟は、沙金をおれから奪おうとする。――それも、沙金の全部を、おれから奪おうとする。いつかは、そうして必ず。ああ、おれの失うのは、ひとり沙金ばかりではない。弟もいつしょに失うのだ。そうして、そのかわりに、次郎と言ふ名の敵かたきができる。――おれは、敵かたきには用捨しない。敵かたきも、おれに用捨はしないだろう。そうなれば、落ち着くところは、今からあらかじめわかっている。弟を殺すか、おれが殺されるか。……)

太郎は、死人のにおいが、鋭く鼻を打つたのに、驚いた。が、彼の心の中の死が、おつたというわけではない。見ると、猪熊いのくまの小路のあたり、とある網代あじろの堀へいの下に腐爛ふらんした子供の死骸しがいが二つ、裸のまま、積み重ねて捨ててある。はげしい天日てんびに、照りつけられたせいか、変色した皮膚のところどころが、べつとりと紫がかつた肉を出して、その上に

はまた青蠅あおばえが、何匹となく止まっている。そればかりではない。一人の子供のうつむけた顔の下には、もう足の早い蟻ありがついた。――

太郎は、まのあたりに、自分の行く末を見せつけられたような心もちがした。そうして、思わず下くちびるを堅くかんだ。――

「ことに、このころは、沙金しゃきんもおれを避けている。たまに会つても、いい顔をした事は、一度もない。時々はおれに面めんと向かつて、悪口あつこうさえきく事がある。おれはそのたびに腹を立てた。打つた事もある。蹴けつた事もある。が、打つているうちに、蹴つているうちに、おれはいつでも、おれ自身を折檻せつかんしているような心もちがした。それも無理はない。おれの二十年の生涯じょうがいは、沙金のあの目の中に宿っている。だから沙金を失うのは、今までのおれを失うのと、変わりはない。

沙金を失い、弟を失い、そうしてそれとともにおれ自身を失つてしまふ。おれはすべてを失う時が来たのかもしれない。……）

そう思ううちに、彼は、もう猪熊いのくまのばばの家の、白い布をぶら下げた戸口へ来た。まだここまで、死人のにおいては、伝わつて来るが、戸口のかたわらに、暗い緑の葉をたれ

た枇杷があつて、その影がわずかながら、涼しく窓に落ちている。この木の下を、この戸口へはいつた事は、何度あるかわからない。が、これからは？

太郎は、急にある氣づかれを感じて、一味の感傷にひたりながら、その目に涙をうかべて、そつと戸口へ立ちよつた。すると、その時である。家の 中から、たちまちけたたましい女の声が、猪熊の爺の声に交じつて、彼の耳を貫ぬいた。沙金なら、捨ててはおけない。

彼は、入り口の布をあげて、うすぐらい家の中へ、せわしく一足ふみ入れた。

#### 四

猪熊のばばに別れると、次郎は、重い心をいだきながら、立本寺の門の石段を、一つずつ数えるように上がつて、そのところどころ剥落した朱塗りの丸柱の下へ来て、疲れたように腰をおろした。さすがの夏の日も、斜めにつき出した、高い瓦にさえぎられて、ここまでではさして来ない。後ろを見ると、うす暗い中に、一体の金剛力士が青蓮花を踏みながら、左手の杵を高くあげて、胸のあたりに燕の糞をつけたまま、寂然と境内の

昼を守つてゐる。——次郎は、ここへ来て、始めて落ち着いて、自分の心もちが考えられるような気になつた。

日の光は、相変わらず目の前の往来を、照り白ませて、その中にとびかう燕の羽を、さながら黒縫子か何かのよう、光させてゐる。大きな日傘をさして、白い水干を着た男が一人、青竹の文挟にはさんだ文を持つて、暑そうにゆつくり通つたあとは、向こうに続いた築土の上へ、影を落とす犬もない。

次郎は、腰にさした扇をぬいて、その黒柿の骨を、一つずつ指で送つたり、もどしたりしながら、兄と自分との関係を、それからそれへ、思い出した。——

なんで自分は、こう苦しまなければ、ならないのであるう。たつた一人の兄は、自分を敵のようと思つてゐる。顔を合わせるごとに、こちらから口をきいても、浮かない返事をして、話の腰を折つてしまふ。それも、自分と沙金とが、今のような事になつてみれば、無理のない事に相違ない。が、自分は、あの女に会うたびに、始終兄にすまないと思つてゐる。別して、会つたのちのさびしい心もちでは、よく兄がいとしくなつて、人知れない涙もこぼしこぼしした。現に、一度なぞは、このまま、兄にも沙金にも別れて、東国へでも下ろうとさえ、思つた事がある。そうしたら、兄も自分を憎まなくなるだろうし、自分

も沙金を忘れられるだろう。そう思つて、よそながら暇いとまごいをするつもりで、兄の所へ会いにゆくと、兄はいつも、そつけなく、自分をあしらつた。そうして、沙金に会うと、――今度は自分が、せつかくの決心を忘れてしまう。が、そのたびに、自分はどのくらい、自分自身を責めた事であろう。

しかし、兄には、自分のこの苦しみがわからない。ただいちずには、自分を、恋の敵かたきだと思つてはいる。自分は、兄にののしられてもいい。顔につばきされてもいい。あるいは場合によつては、殺されてもいい。が、自分が、どのくらい自分の不義を憎んでいるか、どのくらい兄に同情しているか、それだけは、察していてもらいたい。その上でならば、どんな死にざまをするにしても、兄の手にかかれば、本望だ。いや、むしろ、このごろの苦しみよりは、一思いに死んだほうが、どのくらいしあわせだかわからない。

自分は、沙金しゃきんに恋をしている。が、同時に憎んでもいる。あの女の多情な性質は、考えただけでも、腹立たしい。その上に、絶えずうそをつく。それから、兄や自分でさえためらうような、ひどい人殺しも、平氣である。時々、自分は、あの女のみだらな寝姿をながめながら、どうして、自分がこんな女に、ひかれるのだろうと思つたりした。ことに、見ず知らずの男にも、なれなれしく肌はだを任せるのを見た時には、いつそ自分の手で、殺し

てやろうかという気にさせなつた。それほど、自分は、沙金を憎んでいた。が、あの女の目を見ると、自分はやつぱり、誘惑に陥つてしまつた。あの女のよう、醜い魂と、美しい肉身と持つた人間は、ほかにいなゐ。

この自分の憎しみも、兄にはわかつていなゐようだ。いや、元来兄は、自分のように、あの女の獣のような心を、憎んではいないらしい。たとえば、沙金しゃきんとほかの男との関係を見るにしても、兄と自分とは全く目がちがう。兄は、あの女がたれといつしょにいるのを見ても、黙つてゐる。あの女の一時の気まぐれは、気まぐれとして、許してゐるらしい。が、自分は、そういかない。自分にとつては、沙金が<sup>はだみ</sup>肌身けがを汚す事は、同時に沙金が心を汚す事だ。あるいは心を汚すより、以上の事のように思われる。もちろん自分には、あの女の心が、ほかの男に移るのも許されない。が、肌身をほかの男に任せるのは、それよりもなお、苦痛である。それだからこそ、自分は兄に對しても、嫉妬しつとをする。すまないとは思ひながら、嫉妬をする。してみると、兄と自分との恋は、まるでちがう考えが、元になつてゐるのであるまいか。そうしてそのちがいが、よけい二人の仲を、悪くするのではあるまいか。……

次郎は、ぼんやり往来をながめながら、こんな事をしみじみと考へた。すると、ちよう

どその時である。突然、けたたましい笑い声が、まばゆい日の光を動かして、往来のどちらから聞こえて来た。と思うと、かん高い女の声が、舌のまわらない男の声といつしょになつて、人もなげに、みだらな冗談を言いかわして来る。次郎は、思わず扇を腰にさして、立ち上がつた。

が、柱の下をはなれて、まだ石段へ足をおろすかおろさないうちに、小路こうじを南へ歩いて来た二人の男なんにょ女めが、彼の前を通りかかつた。

男は、桺かばざくら桜さくらの直垂ひたたれに梨打なしうちの烏帽子えぼしをかけて、打ち出しの太刀たちを潤達かつたつに佩はいた、三十ばかりの年配で、どうやら酒に酔つてゐるらしい。女は、白地にうす紫の模様のある衣きぬを着て、市女笠いちめがさに被衣をかけてゐるが、声と言ひ、物ごしと言ひ、紛れもない沙金しゃきんである。——次郎は、石段をおりながら、じつとくちびるをかんで、目をそらせた。が、二人とも、次郎には、目をかける様子がない。

「じゃよくつて。きつと忘れちやいやよ。」

「大丈夫だよ。おれがひきうけたからは、大船おおぶねに乗つた氣でいるがいい」

「だつて、わたしのほうじや命がけなんですもの。このくらい、念を押さなくちやしようがないわ。」

男は赤ひげの少しある口を、咽まで見えるほど、あけて笑いながら、指で、ちよいと沙金の頬を突つついた。

「おれのほうも、これで命がけさ。」

「うまく言つているわ。」

二人は、寺の門の前を通りすぎて、さつき次郎が猪熊いのくまのばばと別れた辻つじまで行くと、そこに足をとめたまましばらくは、人目も恥じず、ふざけ合つていたが、やがて、男は、振りかえり振りかえり、何かしきりにからかいながら、辻を東へ折れてしまう。女は、くびすをめぐらして、まだくすくす笑いながら、またこつちへ帰つて来る。——次郎は、石段の下にたたずんで、うれしいのか情けないのか、わからないいような感情に動かされながら、子供らしく顔を赤らめて、被衣かずきの中からのぞいている、沙金しゃきんの大きな黒い目を迎えた。

「今のはやつを見た?」

沙金は、被衣かずきを開いて、汗ばんだ顔を見せながら、笑い笑い、問いかけた。

「見なくつてさ。」

「あればね。——まあここへかけましよう。」

二人は、石段の下の段に、肩をならべて、腰をおろした。幸い、ここには門の外に、ただ一本、細い幹をくねらした、赤松の影が落ちていて。

「あれは、藤判官とうばうがんの所の侍なの。」

沙金は、石段の上に腰をおろすかおろさないのに、市女笠いちめがさをぬいで、こう言つた。小柄な、手足の動かし方に猫ねこのような敏捷びんしょくさがある、中肉ちゅうにくの、二十五六の女である。額は、恐ろしい野性と異常な美しさとが、一つになつたとでもいうのであろう。狭い額とゆたかな頬ほおと、あざやかな歯とみだらなくちびると、鋭い目と鷹揚おうような眉と、——すべて、一つになり得そうもないものが、不思議にも一つになつて、しかもそこに、爪ばかりの無理もない。が、中でもみごとなのは、肩にかけた髪で、これは、日の光のかげんによると、黒い上につややかな青みが浮く。さながら、鳥の羽根からすと違ひがない。次郎は、いつ見ても変わらない女のなまめかしさを、むしろ憎いように感じたのである。

「そうして、お前さんの情人おとこなんだろう。」

沙金は、目を細くして笑いながら、無邪氣らしく、首をふつた。

「あいつのばかと言つたら、ないのよ。わたしの言う事なら、なんでも、犬のようにくじやないの。おかげで、何もかも、すつかりわかつてしまつた。」

「何がさ。」

「何がつて、とうほうがん藤判官の屋敷の様子がよ。そりやひとかたならないおしゃべりなんでしょ。さつきなんぞは、このごろ、あすこで買つた馬の話まで、話して聞かしたわ。——そうそう、あの馬は太郎さんに頼んで盗ませようかしら。みちのくで陸奥出のさんさいじま三才駒さんさいこまだつていうから、まんざらでもないわね。」

「そうだ。兄きなら、なんでもお前の御意ぎよい次第だから。」

「いやだわ。やきもちをやかれるのは、わたし大きらい。それも、太郎さんなんぞ、——そりやはじめは、わたしのほうでも、少しばどうとか思つたけれど、今じやもうなんでもないわ。」

「そのうちに、わたしの事もそう言う時が来やしないか。」

「それは、どうだかわかりやしない。」

沙金しゃきんは、またかん高い声で、笑つた。

「おこつたの？　じや、来ないつて言いましょうか。」

「内心ないしんによやしゃないしんによやしゃ

「内心女夜叉ないしんによやしゃさね。お前は。」

次郎は、顔をしかめながら、足もとの石を拾つて、向こうへ投げた。

「そりや、女夜叉によやしゃかもしれないわ。ただ、こんな女夜叉によやしゃにほれられたのが、あなたの因果だわね。——まだうたぐつているの。じやわたし、もう知らないからいい。」

沙金は、こう言つて、しばらくじつと、往来を見つめていたが、急に鋭い目を、次郎の上に転じると、たちまち冷ややかな微笑が、くちびるをかすめて、一過した。

「そんなに疑うのなら、いい事を教えてあげましょか。」

「いい事?」

「ええ」

女は、顔を次郎のそばへ持つて來た。うす化粧のにおいが、汗にまじつて、むんと鼻をつく。——次郎は、身のうちがむずがゆいほど、はげしい衝動を感じて、思わず顔をわきへむけた。

「わたしね、あいつにすつかり、話してしまつたの。」

「何を?」

「今夜、みんなで藤判官とうばうがんの屋敷へ、行くという事を。」

次郎は、耳を信じなかつた。息苦しい官能の刺激も、一瞬の間に消えてしまう。——彼はただ、疑わしげに、むなしく女の顔を見返した。

「そんなに驚かなくたつていいわ。なんでもない事なのよ。」

沙金は、やや声を低めて、あざわらうような調子を出した。

「わたしこう言つたの。わたしの寝る部屋は、あの大路面の檜垣のすぐそばなんですが、ゆうべその檜垣の外で、きっと盗人でしよう、五六人の男が、あなたの所へはいる相談をしているのが聞こえました。それがしかも、今夜なんです。おなじみがいに、教えてあげましたから、それ相当の用心をしないと、あぶのうござんすよつて。だから、今夜は、きっと向こうにも、手くばりがあるわ。あいつも、今人を集めに行つたところなの。二十人や三十人の侍は、くるにちがいなくつてよ。」

「どうしてまた、そんなよけいな事をしたのさ。」

次郎は、まだ落ち着かない様子で、当惑したらしく、沙金の目をうかがつた。

「よけいじやないわ。」

沙金は、気味悪く、微笑した。そうして、左の手で、そつと次郎の右の手に、さわりながら、

「あなたのためにしてたの。」

「どうして？」

「こう言いながら、次郎の心には、恐ろしいあるものが感じられた。まさか——「まだわからない？」 そう言つておいて、太郎さんに、馬を盗む事を頼めば——ね。いくらなんだつて、一人じやかなわないでしよう。いえさ、ほかのものが加勢をしたつて、知れたものだわ。 そうすれば、あなたもわたしも、いいじやないの。」

次郎は、全身に水を浴びせられたような心もちがした。

「兄きを殺す！」

沙金<sup>しゃきん</sup>は、扇をもてあそびながら、素直にうなずいた。

「殺しちや悪い？」

「悪いよりも——兄きを<sup>わな</sup>罠にかけて——」

「じやあなた殺せて？」

次郎は、沙金の目が、野猫<sup>のねこ</sup>のように鋭く、自分を見つめているのを感じた。 そうして、その目の中に、恐ろしい力があつて、それが次第に自分の意志を、麻痺<sup>まひ</sup>させようとするのを感じた。

「しかし、それは卑怯<sup>ひきょう</sup>だ。」

「卑怯でも、しかたがなくはない？」

沙金は、扇をしてて、静かに両手で、次郎の右の手をとらえながら、追窮した。  
 「それも、兄き一人やるのならいいが、仲間を皆、あぶない目に会わせてまで——」  
 こう言いながら、次郎は、しまつたと思った。狡猾な女はもちろん、この機会を見  
 がさない。

「一人やるのならいいの？ なぜ？」

次郎は、女の手をはなして、立ち上がった。そうして、顔の色を変えたまま、黙つて、  
 沙金の前を、右左に歩き出した。

「太郎さんを殺していいんなら、仲間なんぞ何人殺したつて、いいでしよう。」

沙金は、下から次郎の顔を見上げながら、一句を射た。

「おばばはどうする？」

「死んだら、死んだ時の事だわ。」

次郎は、立ち止まって、沙金の顔を見おろした。女の目は、侮蔑と愛欲とに燃えて炭火  
 のように熱を持つている。

「あなたのためなら、わたしたれを殺してもいい。」

このことばの中には、蝎のように、人を刺すものがある。次郎は、再び一種の戦慄を

感じた。

「しかし、兄きは——」

「わたしは、親も捨ててているのじやない？」

こう言つて、沙金は、目を落とすと、急に張りつめた顔の表情がゆるんで、焼け砂の上へ、日に光りながらはらはらと涙が落ちた。

「もうあいつに話してしまつたのに、——今さら取り返しはつきはしない。——そんな事がわかつたら、わたしは——わたしは、仲間に——太郎さんに殺されてしまうじやないの。」

その切れ切れなことばと共に、次郎の心には、おのずから絶望的な勇気が、わいてくる。血の色を失つた彼は、黙つて、土にひざをつきながら、冷たい両手に堅く、沙金の手をとらえた。

彼らは二人とも、その握りあう手のうちに、恐ろしい承諾の意を感じたのである。

白い布をかかげて、家の中に一足ふみこんだ太郎は、意外な光景に驚かされた。――

見ると、広くもない部屋へやの中には、厨くりやへ通う遣戸やりどが一枚、斜めに網代屏風あじろびようぶの上へ、倒れかかって、その拍子にひっくり返つたものであろう、蚊やりをたく土器かわらけが、二つになつてころがりながら、一面にあたりへ、燃え残つた青松葉を、灰といつしよにふりまいている。その灰を頭から浴びて、ちぢれ髪の、色の悪い、肥ふとつた、十六七の下衆げすおんなが一人、これも酒肥さかぶとりに肥ふとつた、はげ頭の老人に、髪の毛をつかまれながら、怪しげな麻の單衣ひとえの、前もあらわに取り乱したまま、足をばたばた動かして、気違へいしいのよう、悲鳴を上げる――と、老人は、左手に女の髪をつかんで、右手に口の欠けた瓶子へいしを、空ざまにさし上げながら、その中にはすすけた液体を、しいて相手の口へつぎこもうとする。が、液体は、いたずらに女の顔を、目と言わず、鼻と言わず、うす黒く横流れするだけで、口へは、ほとんどはいらないらしい。そこで老人は、いよいよ、気をいらつて無理に女の口を、割ろうとする。女は、とられた髪も、ぬけるほど強く、頭を振つて、一滴もそれを飲むまいとする。手と手と、足と足とが、互いにもつれたり、はなれたりして、明るい所から、急にうす暗い家の中へはいつた、太郎の目には、どちらがどちらのからだとも、わからない。が、二人がたれだという事は、もちろん一目見て、それと知れた。――

太郎は、草履を脱ぐ間ももどかしそうに、あわただしく部屋の中へおどりこむと、とつさに老人の右の手をつかんで、苦もなく瓶子をもぎはなしながら、怒氣を帶びて、一喝した。

「何をする？」

太郎の鋭いことば、たちまちかみつくような、老人のことばで答えられた。

「おぬしこそ、何をする。」

「おれか。おれならこうするわ。」

太郎は、瓶子を投げ捨てて、さらに相手の左の手を、女の髪からひき離すと、足をあげて老人を、遺戸の上へ蹴倒した。不意の救いに驚いたのであろう、阿濃はあわてて、一二間這いのいたが、老人の後へ倒れたのを見ると、神仏をおがむように、太郎の前へ手を合わせて、震えながら頭を下げた。と思うと、乱れた髪もつくろわずに、脱兎のごとく身をかわして、はだしのまま、縁を下へ、白い布をひらりとくぐる。——猛然として、追いすがろうとする猪熊の爺を、太郎が再び一蹴して、灰の中に倒した時には、彼女はすでに息を切らせて、枇杷の木の下を北へ、こけつまろびつして、走っていた。……  
「助けてくれ。人殺しじや。」

老人は、こうわめきながら、始めの勢いにも似ず、網代屏風をふみ倒して、厨のほうへ逃げようとする。——太郎は、すばやく猿臂えんびをのべて、浅黄の水干すいかんの襟えりがみ上をつかみながら、相手をそこへ引き倒した。

「人殺し。人殺し。助けてくれ。親殺しじや。」

「ばかな事を。たれがおぬしなぞ殺すものか。」

太郎は、ひざの下に老人を押し伏せたまま、こう高らかに、あざわらつた。が、それと同時に、このおやじを殺したいという欲望が、おさえがたいほど強く、起こつて來た。殺すのには、もちろんなんのめんどうもない。ただ、一突き——あの赤く皮のたるんでいる頸うなじを、ただ、一突き突きさえすれば、それでもう万事が終わつてしまふ。突き通した太刀たちのきつきが、畳つづらまへはいる手答えと、その太刀の柄つかへ感じて來る、断末魔の身もだえと、そうして、また、その太刀を押しもどす勢いで、あふれて來る血のにおいと、——そういう想像は、おのずから太郎の手を、葛つづらま巻きの太刀の柄つかへのばさせた。

「うそじや。うそじや。おぬしは、いつもわしを殺そうと思うていてる。——やい、たれか助けてくれ。人殺しじや。親殺しじや。」

猪熊いのくまの爺おじは、相手の心を見通したのか、またひとしきりはね起きようとして、すまい

ながら、必死になつて、わめき立てる。

「おぬしは、なんで阿濃あつぎを、あのような目にあわせた。さあそのしさいを言え。言わねば……」

「言う。言う。——言うがな。言つたあとでも、おぬしの事じや。殺さないものでも、なからう。」

「うるさい。言うか、言わぬか。」

「言う。言う。言う。が、まず、そこを放してくれ。これでは、息がつまつて、口がきけぬわ。」

太郎は、それを耳にもかけないように、殺氣立つた声で、いらだたしく繰り返した。

「言うか、言わぬか。」

「言う。」と、猪熊いのくまの爺おじは、声をふりしぼつて、まだはね返そと、もがきながら、  
「言うともな。あれはただ、わしが薬をのましようと思うたのじや。それを、あの阿濃あつぎ  
阿呆あほうめが、どうしても飲みおらぬ。されば、ついわしも手荒な事をした。それだけじや。  
いや、まだある。薬をこしらえおつたのは、おばばじや。わしの知つた事ではない。」  
「薬？」では、堕胎おろしぐすり薬くすりだな。いくら阿呆でも、いやがる者をつかまえて、非道な事をす

るおやじだ。」

「それ見い。言えと言うから、言えば、なおおぬしは、わしを殺す気になるわ。人殺し。  
極道。」

「たれがおぬしを殺すと言つた?」

「殺さぬ氣なら、なぜおぬしこそ、太刀の柄へ手をかけているのじや。」

老人は、汗にぬれたはげ頭を仰向けて、上目に太郎を見上げながら、口角に泡をためて、  
こう叫んだ。太郎は、はつと思つた。殺すなら、今だという気が、心頭をかすめて、一  
閃する。彼は思わず、ひざに力を入れながら、太刀の柄を握りしめて、老人の頸のあた  
りをじつと見た。わずかに残つた胡麻塩の毛が、後頭部を半ばおおつた下に、二筋の腱が、  
赤い鳥肌の皮膚のしわを、そこだけ目だたないよう、のばしている。——太郎は、そ  
の頸を見た時に、不思議な憐憫を感じだした。

「人殺し。親殺し。うそつき。親殺し。親殺し。」

猪熊の爺は、つづけさまに絶叫しながら、ようやく、太郎のひざの下からはね起きた。  
はね起きると、すばやく倒れた遺戸を小盾にとつて、きよろきよろ、目を左右にくばりな  
がら、すきさえあれば、逃げようとする。——その一面に赤く地ばれのした、目も鼻もゆ

がんんでいる、狡猾こうかつらしい顔を見ると、太郎は、今さらのように、殺さなかつたのを後悔した。が、彼はおもむろに太刀の柄から手を離すと、彼自身をあわれむように苦笑をくちびるに浮かべながら、手近の古置の上へしぶしぶ腰をおろした。

「おぬしを殺すような太刀は、持たぬわ。」

「殺せば、親殺しじやて。」

彼の様子に安心した、猪熊いのくまの爺おじは、そろそろ遣戸やりどの後ろから、にじり出ながら、太郎のすわつたのと、すじかいに敷いた畳の上へ、自分も落ちつかない尻しりをすえた。

「おぬしを殺して、なんで親殺しになる？」

太郎は、目を窓にやりながら、吐き出すように、こう言つた。四角に空を切りぬいた窓の中には、枇杷びわの木が、葉の裏表に日を受けて、明暗あいあんさまざまな緑の色を、ひとつそりと風のないこずえにあつめている。

「親殺しじやよ。——なぜと言えばな。沙金しゃきんは、わしの義理の子じや。されば、つながるおぬしも、子ではないか。」

「じゃ、その子を妻めにしているおぬしは、なんだ。畜生かな、それともまた、人間かな。」

老人は、さつきの争いに破れた、水干すいかんの袖そでを気にしながら、うなるような声で言つた。

「畜生でも、親殺しはすまいで。」

太郎は、くちびるをゆがめて、あざわらつた。

「相変わらず、達者な口だて。」

「何が達者な口じや。」

猪熊の爺は、急に鋭く、太郎の顔をにらめたが、やがてまた、鼻で笑いながら、

「されば、おぬしにきくがな、おぬしは、このわしを、親と思うか。いやさ、親と思う事ができるかよ。」

「きくまでもないわ。」

「できまいな」

「おお、できない。」

「それが手前勝手じや。よいか。沙金しゃきんはおばばのつれ子じやよ。が、わしの子ではない。」

されば、おばばにつれそうわしが、沙金を子じやと思わねばならぬなら、沙金につれそうおぬしも、わしを親じやと思わねばなるまいがな。それをおぬしは、わしを親とも思わぬ。思わぬどころか、場合によつては、打ちちょうちやく打うち擲きもするではないか。そのおぬしが、わしにばかり、沙金を子と思えとは、どういうわけじや。妻めにして悪いとは、どういうわけじ

や。沙金を妻にするわしが、畜生なら、親を殺そつとするおぬしも、畜生ではないか。」老人は、勝ち誇つた顔色で、しわだらけの人さし指を、相手につきつけるようにしながら、目をかがやかせて、しゃべり立てた。

「どうじや。わしが無理か、おぬしが無理か、いかなおぬしにも、このくらいな事はわかるであろう。それもわしとおばばとは、まだわしが、左兵衛府の下人をしておつたころからのお昔なじみじや。おばばが、わしをどう思うたか、それは知らぬ。が、わしはおばばを懸想していた。」

太郎は、こういう場合、この酒飲みの、狡猾な、卑しい老人の口から、こういう昔語りを聞こうとは夢にも思つていなかつた。いや、むしろ、この老人に、人並みの感情があるかどうか、それさえ疑わしいと、思つていた。懸想した猪熊の爺と懸想された猪熊のばばと、——太郎は、おのずから自分の顔に、一脈の微笑が浮かんで来るのを感じたのである。

「そのうちに、わしはおばばに情人がある事を知つたがな。」

「そんなら、おぬしはきらわれたのじやないか。」

「情人があつたとて、わしのきらわれたという、証拠にはならぬ。話の腰を折るなら、も

うやめじや。」

猪熊の爺は、真顔になつて、こう言つたが、すぐまた、ひざをすすめて、太郎のほうへにじり寄りながら、つばをのみのみ、話しだした。

「そのうちに、おばばがその情人の子をはらんだて。が、これはなんでもない。ただ、驚いたのは、その子を生むと、まもなく、おばばの行き方が、わからなくなつて、しもうた事じや。人に聞けば、疫病えやみで死んだの、筑紫つくしへ下つたのと言いおるわ。あとで聞けば、なんの、奈良坂ならざかのしるべのもとへ、一時身を寄せておつたげじや。が、わしは、それからにわかに、この世が味気なくなつてしまつた。されば、酒も飲む、賭博ばくちも打つ。ついには、人に誘われて、まんまと強盗にさえ身をおとしたがな。綾あやを盗めば綾につけ、錦にしきを盗めば、錦につけ、思い出すのは、ただ、おばばの事じや。それから十年たち、十五年たつて、やつとまたおばばに、めぐり会つてみれば——」

今では全く、太郎と一つ置にすわりこんだ老人は、ここまで話すと、次第に感情がたかぶつて来たせいか、しばらくはただ、涙に頬ほおをぬらしながら、口ばかり動かして、黙つている。太郎は、片目をあげて、別人を見るように、相手のべそをかいた顔をながめた。

「めぐり会つてみれば、おばばは、もう昔のおばばではない。わしも、昔のわしでなかつ

たのじや。が、つれている子の沙金を見れば、昔のおばばがまた、帰つて来たかと思うほど、おもかげがよう似ていて。されば、わしはこう思うた。今、おばばに別れれば、沙金ともまた別れなければならぬ。もし沙金と別れまいと思えば、おばばといつしょになるばかりじや。よし、ならば、おばばを妻にしよう——こう思い切つて、持つたのが、この猪熊の瘦世帶じや。……」

猪熊の爺は、泣き顔を、太郎の顔のそばへ持つて来ながら、涙声でこう言つた。すると、その拍子に、今まで氣のつかなかつた、酒くさいにおいが、ふんとする。——太郎は、あつけにとられて、扇のかげに、鼻をかくした。

「されば、昔からきようの日まで、わしが命にかけて思うたのは、ただ、昔のおばば一人ぎりじや。つまりは今沙金一人ぎりじやよ。それを、おぬしは、何かにつけて、わしを畜生じやなどと言う。このおやじがおぬしは、それほど憎いのか。憎ければ、いつそ殺すがよい。今ここで、殺すがよい。おぬしに殺されれば、わしも本望じや。が、よいか、親を殺すからは、おぬしも、畜生じやぞよ。畜生が畜生を殺す——これは、おもしろかろう。」

涙がかわくに従つて、老人はまた、元のように、ふて腐れた悪態をつきながら、しわ

だらけの人さし指をふり立てた。

「畜生が畜生を殺すのじや。さあ殺せ。おぬしは、卑怯者ひきょうものじやな。ははあ、さつき、わしが阿濃あこぎに薬をくれようとしたら、おぬしが腹を立てたのを見ると、あの阿呆あほうをはらませたのも、おぬしらしいぞ。そのおぬしが、畜生でのうて、何が畜生じや。」

こう言いながら、老人は、いちはやく、倒れた遣戸やりどの向こうへとびのいて、すわと言えば、逃げようとするけはいを示しながら、紫がかつた顔じゆうの造作ぞうさくを、憎々しくゆがめて見せる。——太郎は、あまりの雑言ぞうごんに堪えかねて、立ち上がりながら、太刀の柄つかへ手をかけたが、やめて、くちびるを急に動かすとたちまち相手の顔へ、一塊の痰たんをはきかけた。

「おぬしのような畜生には、これがちようど、相当だわ。」

「畜生呼ばわりは、おいてくれ。沙金しゃきんは、おぬしばかりの妻めかよ。次郎殿の妻めでもないか。されば、弟の妻めをぬすむおぬしもやはり、畜生じや。」

太郎は、再びこのおやじを殺さなかつた事を後悔した。が、同時にまた、殺そうという気の起ころ事を恐れもした。そこで、彼は、片目を火のようひらめかせながら、黙つて、席を蹴けつて去ろうとする——すると、その後ろから、猪熊いのくまの爺おじはまた、指をふりふり、

罵詈を浴びせかけた。

「おぬしは、今の話をほんとうだと思うか。あれは、みんなうそじや。ばばが昔なじみじやというのも、うそなら、沙金がおばばに似ているというのもうそじや。よいか。あれは、みんなうそじや。が、とがめたくも、おぬしはとがめられまい。わしはうそつきじやよ。畜生じやよ。おぬしに殺されそくなつた、人でなしじやよ。……」

老人は、こう唾罵を飛ばしながら、おいおい、呂律ろれつがまわらなくなつて來た。が、なおも濁つた目に懸命の憎惡ぞうおを集めながら、足を踏み鳴らして、意味のない事を叫びつづける。  
——太郎は、堪えがたい嫌惡けんおの情に襲われて、耳をおおうようにしながら、そそういのく々々、猪いのく熊まの家を出た。外には、やや傾きかかった日がさして、相変わらずその中を、燕つばくらが軽々と流れている。——

「どこへ行こう。」

外へ出て、思わずこう小首を傾けた太郎は、ふとさつきまでは、自分が沙金しゃきんに会うつもりで、猪熊へ来たのに、気がついた。が、どこへ行つたら、沙金に会えるという、当てもない。

「ままで。羅生門らしきょうもんへ行つて、日の暮れるのでも待とう。」

彼のこの決心には、もちろん、いくぶん沙金に会えるという望みが、隠れている。沙金は、日ごろから、強盗にはいる夜よには、好んで、男装束に身をやつした。その装束や打ち物は、みな羅生門の楼上に、皮子へ入れてしまつてある。——彼は、心をきめて、小路を南へ、大またに歩きだした。

それから、三条を西へ折れて、耳敏川の向こう岸を、四条まで下つてゆく——ちょうど、その四条の大路へ出た時の事である。太郎は、一町を隔てて、この大路を北へ、立本寺の築土の下を、話しながら通りかかる、二人の男女の姿を見た。

朽ち葉色の水干とうす紫の衣きぬとが、影を二つ重ねながら、はればれした笑い声をあとに残して、小路から小路へ通りすぎる。めまぐるしい燕の中に、男の黒鞞の太刀が、きらりと日に光つたかと思うと、二人はもう見えなくなつた。

太郎は、額を曇らせながら、思わず道ばたに足をとめて、苦しそうにつぶやいた。

「どうせみんな畜生だ。」

ふけやすい夏の夜は、早くも亥の上刻に迫つて來た。——

月はまだ上らない。見渡す限り、重苦しいやみの中に、声もなく眠つてゐる京の町は、加茂川の水面がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光つてゐるばかり、大路小路の辻つじつじ々にも、今はようやく灯影が絶えて、内裏といい、すすき原といい、町家といい、ことごとく、静かな夜空の下に、色も形もおぼろげな、ただ広い平面を、ただ、際限もなく広げてゐる。それがまた、右京左京の区別なく、どこも森閑と音を絶つて、たまに耳にはいるのは、すじかいに声を飛ばすほどとぎすのほかに、何もない。もしその中に一点でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなるものの声が聞こえるとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の内陣で、金泥も緑青も所斑な、孔雀明王の画像を前に、常燈明の光をたのむ参籠の人々か、さもなくば、四条五条の橋の下で、短夜を芥あくたび火の影にぬすむ、こじき法師の群れであろう。あるいはまた、夜な夜な、往来の人をおびやかす朱雀門の古狐が、瓦の上、草の間に、ともすともなくともすという、鬼火のたぐいであるかもしれない。が、そのほかは、北は千本、南の鳥羽街道の境を尽くして、蚊やりの煙のにおいのする、夜色の底に埋もれながら、河原よもぎの葉を動かす、微風もまるで知らないように、沈々としてふけていいる。

その時、王城の北、朱雀大路すざくおおじのはずれにある、羅生門らじょうもんのほとりには、時ならぬ弦打ちの音が、さながら蝙蝠こうもりの羽音のように、互いに呼びつ答へつして、あるいは一人、あるいは三人、あるいは五人、あるいは八人、怪しげないでたちをしたもの姿が、次第にどこからか、つどつて來た。おぼつかない星明かりに透かして見れば、太刀たちをはくもの、矢を負うもの、斧おのを執るもの、戟ほこを持つもの、皆それぞれ、得物えものに身を固めて、脛布藁はばきわらう沓はずの装いもかいがいしく、門の前に渡した石橋へ、むらむらと集まつて、列を作る——と、まつさきには、太郎がいた。それにつづいて、さつきの争いも忘れたように、猪熊いのくまの爺おじが、物々しく鉢はこの先を、きらりと暗にひらめかせる。続いて、次郎、猪熊いのくまのばば、少し離れて、阿濃あこぎもいる。それにかこまれて、沙金しゃきんは一人、黒い水干すいかんに太刀たちをはいて、胡縄やなぐいを背に弓杖ゆんづえをつきながら、一同を見渡して、あでやかな口を開いた。——

「いいかい。今夜の仕事は、いつもより手ごわい相手なんだからね。みなそのつもりで、いておくれ。さしづめ十五六人は、太郎さんといつしよに、裏から、あとはわたしといつしよに、表からはいつてもらおう。中でも目ぼしいのは、裏の廄うまやにいる陸奥みちのく出の馬だがね。これは、太郎さん、あなたに頼んでおくわ。よくつて。」

太郎は、黙つて星を見ていたが、これを聞くと、くちびるをゆがめながら、うなずいた。

「それから断わつておくが、女子供を質になんぞとつては、いけないよ。あとの始末がめんどうだからね。じゃ、人数がそろつたら、そろそろ出かけよう。」

こう言つて、沙金は弓をあげて、一同をさしまねいたが、しょんぼり、指をかんで立つてゐる、阿濃を顧みると、またやさしくことばを添えた。

「じゃ、お前はここで、待つていておくれ。一刻か二刻で、皆帰つてくるからね。」

阿濃は、子供のように、うつとり沙金の顔を見て、静かに合点した。

「されば、行こう。ぬかるまいぞ、多<sup>たじ</sup>裏<sup>よう</sup>丸<sup>まる</sup>。」

猪熊<sup>いのくま</sup>の爺<sup>おじ</sup>は、戟<sup>ほこ</sup>をたばさみながら、隣にいる仲間をふり返つた。蘇芳染<sup>すおうぞめ</sup>の水<sup>すい</sup>干<sup>かん</sup>を着た相手は、太刀<sup>たち</sup>のつばを鳴らして、「ふふん」と言つたまま、答えない。そのかわりに、斧<sup>おの</sup>をかついだ、青ひげのさわやかな男が、横あいから、口を出した。

「おぬしこそ、また影法師なぞにおびえまいぞ。」

これと共に、二十三人の盜人どもは、ひとしく忍び笑いをもらしながら、沙金を中に、雨雲のむらがるごとく、一団の殺氣をこめて、朱雀大路へ押し出すと、みぞをあふれた泥<sup>どろみず</sup>水<sup>みず</sup>が、くぼ地くぼ地へ引かれるようにやみにまぎれて、どこへ行つたか、たちまちのうちに、見えなくなつた。……

あとには、ただ、いつか月しろのした、うす明るい空にそむいて、羅生門の高い甍が、寂然と大路を見おろしているばかり、またしてもほととぎすの、声がおちこちに断続して、今まで七丈五級の大石段に、たたずんでいた阿濃の姿も、どこへ行つたか、見えなくなつた。——が、まもなく、門上の楼に、おぼつかない燈がともつて、窓が一つ、かたりとあくと、その窓から、遠い月の出をながめている、小さな女の顔が出た。阿濃は、こうして、次第に明るくなつてゆく京の町を、目の下に見おろしながら、胎児の動くのを感じるごとに、ひとりうれしそうに、ほほえんでいるのである。

## 七

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀たちをふるいながら、小路こうじを南へ二三町、下るともなく下つて來た。今は沙金しゃきんの安否を氣づかつてゐる余裕もない。侍は衆をたのんで、すきまもなく切りかける。犬も毛の逆立つた背をそびやかして、前後をきらわず、飛びかかつた。おりからの月の光に、往来は、ほのかながら、打つ太刀をたがわせないほどに、明るくなつてゐる。——次郎は、その中で、人と犬とに四方を囲まれ

ながら、必死になつて、切りむすんだ。

相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる道はない。彼の心には、こういう覚悟と共に、ほとんど常軌を逸した、凶猛な勇気が、刻々に力を増して來た。相手の太刀を受け止めて、それを向こうへ切り返しながら、足もとを襲おうとする犬を、とつさに横へかわしてしまつ。——彼は、この働きをほとんど同時にした。そればかりではない。どうかするとその拍子に切り返した太刀を、逆にまわして、後ろから来る犬の牙を、防がなければならぬ事さえある。それでもさすがにいつか傷をうけたのであらう。月明かりにすかして見ると、赤黒いものが一すじ、汗にじんで、左の小鬢こびんから流れている。が、死に身になつた次郎には、その痛みも気にならない。彼は、ただ、色を失つた額に、ひいでた眉まゆを一文字にひそめながら、あたかも太刀たちに使われる人のように、烏帽子えぼしも落ち、水干いかんも破れたまま、縦横に刃やいばを交えているのである。

それがどのくらい続いたか、わからない。が、やがて、上段に太刀をふりかざした侍の一人が、急に半身を後ろへそらせて、けたたましい悲鳴をあげたと思うと、次郎の太刀は、早くもその男の脾腹ひばらを斜めに、腰のつがいまで切りこんだのであらう。骨を切る音が鈍く響いて、横に薙ないだ太刀の光が、うすやみをやぶつてきらりとする。——と、その太刀が

宙におどつて、もう一人の侍の太刀を、ちようと下から払つたと見る間に、相手は肘をしたたか切られて、やにわに元来たもとへ、敗走した。それを次郎が追いすがりざまに、切ろうとしたのと、狩犬の一頭が鞠のよう身をはずませて、彼の手もとへかぶりついたのとが、ほとんど、同時の働きである。彼は、一足あとへとびのきながら、ふりむかつた血刀の下に、全身の筋肉が一時にゆるむような気落ちを感じて、月に黒く逃げてゆく相手の後ろ姿を見送つた。そうしてそれと共に、悪夢からさめた人のような心もちで、今自分のいる所が、ほかならない立本寺の門前だという事に気がついた。――

これから半刻ばかり以前の事である。藤判官の屋敷を、表から襲つた倫盜の一  
群は、中門の右左、車宿りの内外から、思いもかけず射出した矢に、まず肝を破られた。  
まつさきに進んだ真木島の十郎が、太腿を籠深く射られて、すべるようなどうと倒れる。それを始めとして、またたく間に二三人、あるいは顔を破り、あるいは臂を傷つけて、あわただしく後ろを見せた。射手の数は、もちろん何人だかわからない。が、染め羽白羽のとがり矢は、中には物々しい鏑の音さえ交えて、またひとしきり飛んで来る。後ろに下がつていた沙金でさえ、ついには黒い水干の袖を斜めに、流れ矢に射通された。  
「お頭にけがをさすな。射ろ。射ろ。味方の矢にも、鏑があるぞ。」

交野の平六が、斧の柄をたたいて、こうののしると、「おう」という答えがあつて、たちまち盜人の中からも、また矢叫びの声が上がり始める。太刀の柄に手をかけて、やはり後ろに下がっていた次郎は、平六のことばに、一種の苛責を感じながら、見ないようにして沙金の顔を横からそつとのぞいて見た。沙金は、この騒ぎのうちにも冷然とたたずみながら、ことさら月の光にそむきいて、弓杖をついたまま、口角の微笑もかくさず、じつと矢の飛びかうのを、ながめている。——すると、平六が、またいら立たしい声を上げて、横あいから、こう叫んだ。

「なぜ十郎を捨てておくのじや。おぬしたちは矢玉が恐ろしゆうて、仲間を見殺しにする気かよ。」

太腿を縫われた十郎は、立ちたくも立てないのであろう、太刀を杖にして居ざりながら、ちょうど羽根をぬかれた鴉のよう、矢を避け避け、もがいている。次郎は、それを見ると、異様な戦慄を覚えて、思わず腰の太刀をぬき払つた。が、平六はそれを知ると、流し目にじろりと彼の顔を見て、

「おぬしは、お頭に付き添うていればよい。十郎の始末は、小盗人でたくさんじや。」と、あざけるように言い放つた。

次郎は、このことばに皮肉な侮蔑<sup>ぶべつ</sup>を感じて、くちびるをかみながら、鋭く平六の顔を見返した。——すると、ちょうどそのとたんである。十郎を救おうとして、ばらばらと走り寄つた、盗人たちの機先を制して、耳をつんざく一<sup>いつせい</sup>声<sup>いつの</sup>の角を合図に、粉々として乱れる矢の中を、門の内から耳のとがつた、牙<sup>きば</sup>の鋭い、狩犬<sup>けいぬ</sup>が六七頭すさまじいうなり声を立てながら、夜目にも白くほこりを巻いて、まつしぐらに衝<sup>つ</sup>いて出た。続いてそのあとから十人十五人、手に手に打ち物を取つた侍が、先を争つて屋敷の外へ、ひしめきながらあふれて来る。味方ももちろん、見てはいない。斧<sup>おの</sup>をふりかざした平六を先に立てて、太刀や鉾<sup>ほこ</sup>が林のよう<sup>けもの</sup>に、きらめきながら並んだ中から、人とも獸ともつかない声を、たれとも知らずわつと上げると、始めのひるんだけしきにも似ず一度に備えを立て直して、猛然として殺到する。沙金<sup>しゃきん</sup>も、今は弓にたかうすびようの矢をつがえて、まだ微笑を絶たない顔に、一脈の殺氣を浮かべながら、すばやく道ばたの築土<sup>ついじ</sup>のこわれを小楯<sup>こだて</sup>にとつて、身がまえた。

やがて敵と味方は、見る見るうちに一つになつて、氣の違つたようにわめきながら、十郎の倒れている前後をめぐつて、無二無三に打ち合い始めた。その中にまた、狩犬がけたましく、血に飢えた声を響かせて、戦いはいざれが勝つとも、しばらくの間はわからな

い。そこへ一人、裏へまわった仲間の一人が、汗と埃<sup>ほこり</sup>とにまみれながら、二三か所薄手を負った様子で、血に染まつたままかけつけた。肩にかついた太刀の刃のこぼれでは、このほうの戦いも、やはり存外手痛かつたらしい。

「あつちは皆ひき上げますぜ。」

その男は、月あかりにすかしながら、沙金の前へ来ると、息を切らし切らし、こう言つた。

「なにしろ肝腎<sup>かんじん</sup>の太郎さんが、門の中で、やつらに囮まれてしまつたという騒ぎでしてな。」

沙金<sup>しゃきん</sup>と次郎とは、うす暗い築土<sup>ついじ</sup>の影の中で、思わず目と目を見合せた。

「囮まれて、どうしたえ。」

「どうしたか、わかりません。が、事によると、——まあそれもあの人人の事だから、万々大丈夫だろうと思ひますがな。」

次郎は、顔をそむけながら、沙金のそばを離れた。が、小盜<sup>こぬすび</sup>人はもちろんそんな事は、気に入らない。

「それにおじじやおばばまで、手を負つたようでした。あのぶんじや殺されたやつも、四

五人はありませんよ。」

沙金はうなずいた。そうして次郎のあとから追いかけるように、険のある声で、「じゃ、わたしたちもひき上げましょう。次郎さん、口笛を吹いてちようだい。」と言つた。

次郎は、あらゆる表情が、凝り固まつたような顔をしながら、左手の指を口へ含んで、銳く二声、口笛の音を飛ばせた。これが、仲間にだけ知られている、引き揚げの時の合図である。が、盗人たちは、この口笛を聞いても、踵をめぐらす様子がない。（実は、人と犬とにとりかこまれてめぐらすだけの余裕がなかつたせいであろう。）口笛の音は、蒸し暑い夜の空気を破つて、むなしく小路の向こうに消えた。そうしてそのあとには、人の叫ぶ声と、犬のほえる声と、それから太刀の打ち合う音どが、はるかな空の星を動かして、いつそう騒然と、立ちのぼつた。

沙金は、月を仰ぎながら、稻妻のごく眉を動かした。

「しかたがないわね。じゃ、わたしたちだけ帰りましょう。」

そういう話のまだ終わらないうちに、そうして、次郎がそれを聞かないもののように、再び指を口に含んで相図を吹こうとした時に、盗人たちの何人かが、むらむらと備えを乱

して、左右へ分かれた中から、人と犬とが一つになつて、二人の近くへ迫つて來た。——  
 と思うと、沙金の手に弓<sup>ゆがえ</sup>返りの音がして、まつさきに進んだ白犬が一頭、たかうすびようの矢に腹を縫われて、苦鳴と共に、横に倒れる。見る間に、黒血がその腹から、斑々<sup>はんぱん</sup>として砂にたれた。が、犬に続いた一人の男は、それにもおじず、太刀をふりかざして、横あいから次郎に切つてかかる。その太刀が、ほとんど無意識に受けとめた、次郎の太刀の刃を打つて、鏘然<sup>そうぜん</sup>とした響きと共に、またたく間に<sup>あいだ</sup>火花を散らした。——次郎はその時、月あかりに、汗にぬれた赤ひげと切り裂かれた樺<sup>かば</sup>桜<sup>さくら</sup>の直<sup>ひたたれ</sup>垂<sup>たれ</sup>とを、相手の男に認めたのである。

彼は直<sup>じきげ</sup>下に、立本寺<sup>りゆうほんじ</sup>の門前を、ありありと目に浮かべた。そうして、それと共に、恐ろしい疑惑が、突然として、彼を脅かした。沙金<sup>しゃきん</sup>はこの男と腹を合わせて、兄のみならず、自分をも殺そうとするのであるまいか。一髪の間に<sup>かん</sup>こういう疑いをいだいた次郎は、目の前が暗くなるような怒りを感じて、相手の太刀<sup>たち</sup>の下を、脱兎<sup>だつと</sup>のごとく、くぐりぬけると、両手に堅く握つた太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。そうして、ひとたまりもなく倒れる相手の男の顔を、したたか藁<sup>わら</sup>沓<sup>うづ</sup>でふみにじつた。

彼は、相手の血が、生暖かく彼の手にかかつたのを感じた。太刀の先<sup>あら</sup>が肋<sup>あばら</sup>の骨に触れて、

強い抵抗を受けたのを感じた。そうしてまた、断末魔の相手が、ふみつけた彼の藁沓に、下から何度もかみついたのを感じた。それが、彼の復讐心に、快い刺激を与えたのは、もちろんである。が、それにつれて、彼はまた、ある名状しがたい心の疲労に、襲われた。もし周囲が周囲だつたら、彼は必ずそこに身を投げ出して、飽くまで休息をむさぼつた事であろう。しかし、彼が相手の顔をふみつけて、血のしたたる太刀を向こうの胸から引きぬいているうちに、もう何人かの侍は、四方から彼をとり囲んだ。いや、すでに後ろから、忍びよつた男の鉢は、危うく鋒を、彼の背に擬している。が、その男は、不意に前へよろめくと、鉢の先に次郎の水干の袖を裂いて、うつむけにがくりと倒れた。たかうすびようの矢が一筋、颶然と風を切りながら、ひとゆりゆつて後頭部へ、ぐさと笠深く立つたからである。

それからのちの事は、次郎にも、まるで夢のようにしか思われない。彼はただ、前後左右から落ちて来る太刀の中に、獣のようなうなり声を出して、相手を選まず渡り合つた。周囲に沸き返つている、声とも音ともつかない物の響きと、その中に出没する、血と汗とにまみれた人の顔と——そのほかのものは、何も目にはいらない。ただ、さすがに、あとにのこして来た沙金の事が、太刀からほとばしる火花のように、時々心にひらめいた。

が、ひらめいたと思ううちに、刻々迫つてくる生死の危急が、たちまちそれをかき消してしまふ。そうして、そのあとにはまた、太刀音と矢たけびとが、天をおおう蝗の羽音のように、築土にせかれた小路こうじの中で、とめどもなくわき返つた。——次郎は、こういう勢いに促されて、いつか二人の侍と三頭の犬とに追われながら、小路を南へ少しづつ切り立てられて來たのである。

が、相手の一人を殺し、一人を追いはらつたあとで、犬だけなら、恐れる事もないと思つたのは、結局次郎の空だのみにすぎなかつた。犬は三頭みつが三頭ながら、大きさも毛なみも一対な茶まだらの逸物いちもつで、子牛もこれにくらべれば、大きい事はあつても、小さい事はない。それが皆、口のまわりを人間の血にぬらして、前に変わらず彼の足もとへ、左右から襲いかかつた。一頭の頤あごを蹴返すと、一頭が肩先へおどりかかる。それと同時に、一頭の牙きばが、すんでに太刀たちを持った手を、かもうとした。とまた、三頭とも巴ともえのよう、彼の前後に輪を描いて、尾を空ざまに上げながら、砂のにおいをかぐように、頤あごを前足へすりつけて、びようびようとほえ立てる。——相手を殺したのに、気のゆるんだ次郎は、前よりもいつそう、この狩犬の執拗しうねい働きに悩まされた。

しかも、いら立てば立つほど、彼の打つ太刀は皆空くうを切つて、ややともすれば、足場

失わせようとする。犬は、そのすきに乗じて、熱い息を吐きながら、いよいよ休みなく肉薄した。もうこうなつては、ただ、窮余の一策しか残つていない。そこで、彼は、事によつたら、犬が追いあぐんで、どこかに逃げ場ができるかもしれないという、一縷の望みにへとび越えると、月の光をたよりにして、ひた走りに走り出した。が、もとよりこの企ても、しよせんはおぼれようとするものが、藁わらでもつかむのと変わりはない。犬は、彼が逃げるのを見ると、ひとしきりりと尾を巻いて、あと足に砂を蹴け上げながら真一文字に追いすがつた。

が、彼のこの企ては、単に失敗したというだけの事ではない。実はそれがために、かえつて虎口ここうにはいるような事ができたのである。——次郎は立本寺りゆうほんじの辻つじをきわどく西へ切れて、ものの二町と走るか走らないうちに、たちまち行く手の夜を破つて、今自身を追つている犬の声より、より多くの犬の声が、耳を貫ぬいて起こるのを聞いた。それから、月に白しらんだ小路こうじをふさいで、黒雲に足のはえたような犬の群ぐんが、右往左往に入り乱れて、餌食えいきを争つてゐるさまが見えた。最後に——それはほとんど寸刻のいとまもなかつたくらいである。すばやく彼を駆けぬけた狩犬の一頭が、友を集めるように高くほえると、そこ

に狂つていた犬の群れは、ことごとく相呼び相答えて、一度にぎんぎんの声をあげながら、見る間に彼を、その生きて動く、なまぐさい毛皮の渦巻きの中へ巻きこんだ。深夜、この小路に、こうまで犬の集まつていたのは、もとよりいつもある事ではない。次郎は、この廃都をわが物顔に、十二十と頭をそろえて、血のにおいに飢えて歩く、獰猛な野犬の群れが、ここに捨ててあつた疫病の女を、宵のうちから餌食にして、互に牙をかみながら、そのちぎれちぎれな肉や骨を、奪い合つてゐるところへ、来たのである。

犬は、新しい餌食を見ると、一瞬のいとまもなく、あらしに吹かれて飛ぶ稻穂のように、八方から次郎へ飛びかかつた。たくましい黒犬が、太刀の上をおどり越えると、尾のない狐に似た犬が、後ろから来て、肩をかすめる。血にぬれた口ひげが、ひやりと頬にさわつたかと思うと、砂だらけな足の毛が、斜めに眉の間をなでた。切ろうにも突こうにも、どちらと相手を定める事ができない。前を見ても、後ろを見ても、ただ、青くかがやいている目と、絶えずあえいでいる口どがあるばかり、しかもその目とその口が、数限りもなく、道をうずめて、ひしひしと足もとに迫つて来る。——次郎は、太刀を回しながら、急に、猪熊のばばの話を思い出した。「どうせ死ぬのなら一思いに死んだほうがいい。」彼は、そう心に叫んで、いさぎよく目をつぶつたが、喉をかもうとする犬の息が、暖かく顔へか

かると、思わずまた、目をあいて、横なぐりに太刀をふるつた。何度それを繰り返したか、わからない。しかし、そのうちに、腕の力が、次第に衰えて来たのであろう、打つ太刀が、一太刀ごとに重くなつた。今では踏む足さえ危うくなつた。そこへ、切つた犬の数よりも、はるかに多い野犬の群れが、あるいは芒原の向こうから、あるいは築土のこわれをぬけて、続々として、つどつて来る。――

次郎は、絶望の目をあげて、天上の小さな月を一瞥しながら、太刀を両手にかまえたまま、兄の事や沙金の事を、一度に石火のごとく、思い浮かべた。兄を殺そうとした自分が、かえつて犬に食われて死ぬ。これより至極の天罰はない。――そう思うと、彼の目には、おのずから涙が浮かんだ。が、犬はその間も、用捨はしない。さつきの狩犬の一頭が、ひらりと茶まだらな尾をふるつたかと思うと、次郎はたちまち左の太腿に、鋭い牙の立つたのを感じた。

するとその時である。月にほのめいた両京二十七坊の夜の底から、かまびすしい犬の声を压してはるかに裏々たる馬蹄の音が、風のように空へあがり始めた。……

しかしその間も阿濃だけは、安らかな微笑を浮かべながら、羅生門の楼上にたたずんで、遠くの月の出をながめている。東山の上が、うす明るく青んだ中に、ひでりにやせた月は、おもむろにさみしく、中空に上つてゆく。それにつれて、加茂川にかかる橋が、その白々とした水光りの上に、いつか暗く浮き上がつて来た。

ひとり加茂川ばかりではない。さつきまでは、目の下に黒く死人のおいを藏していた京の町も、わずかの間に、つめたい光の鍍金をかけられて、今では、越の国の人を見るという蜃氣楼のようだに、塔の九輪や伽藍の屋根を、おぼつかなく光らせながら、ほのかに明るみと影の中に、あらゆる物象を、ぼんやりとつぶんでいる。町をめぐる山々も、日中のほどぼりを返しているのであろう、おのずから頂きをおぼろげな月明かりにぼかしながら、どの峰も、じつと物を思つてもいるように、うすい靄の上から、静かに荒廃した町を見おろしている——と、その中で、かすかに凌霄花のにおいがした。門の左右を埋める藪のところどころから、簇々とつるをのばしたその花が、今では古びた門の柱にまといついて、ずり落ちそうになつた瓦の上や、蜘蛛の巣をかけた檻の間へ、はい上がつたのがあるからであろう。……

窓によりかかつた阿濃は、鼻の穴を大きくして、思い入れ凌霄花のにおいを吸いながら、なつかしい次郎の事を、そうして、早く日の目を見ようとして、動いている胎児の事を、それからそれへと、とめどなく思いつづけた。——彼女は双親を覚えていない。生まれた所の様子さえ、もう全く忘れている。なんでも幼い時に一度、この羅生門のような、大きな丹塗りの門の下を、たれかに抱くか、負われかして、通つたという記憶がある。が、これももちろん、どのくらいほんとうだか、確かな事はわからない。ただ、どうにかこうにか、覚えているのは、物心がついてからのちの事ばかりである。そうして、それがまた、覚えていないほうがよかつたと思うような事ばかりである。ある時は、町の子供にいじめられて、五条の橋の上から河原へ、さかさまにつき落とされた。ある時は、飢えにせまつてした盜みの咎で、裸のまま、地蔵堂の梁へつり上げられた。それがふと沙金に助けられて、自然とこの盗人の群れにはいったが、それでも苦しい目にあう事は、以前と少しも変わりがない。白痴に近い天性を持つて生まれた彼女にも、苦しみを、苦しみとして感じる心はある。阿濃は猪熊のばばの気に逆らつては、よくむごたらしく打擲された。猪熊の爺には、酔つた勢いで、よく無理難題を言いかけられた。ふだんは何かといったわつてくれる沙金でさえ、瘤にさわると、彼女の髪の毛をつかんで、ずるずる引きずりまわ

す事がある。まして、ほかの盜人たちは、打つにもたたくにも、用捨はない。阿濃は、そのたびにいつもこの羅生門の上へ逃げて来ては、ひとりでしくしく泣いていた。もし次郎が来なかつたら、そうして時々、やさしいことばをかけてくれなかつたら、おそらくとうにこの門の下へ身を投げて、死んでしまつていた事であろう。

煤のすすのようなものが、ひらひらと月にひるがえつて、甍の下から、窓の外をうす青い空へ上がつた。言うまでもなく蝙蝠である。阿濃は、その空へ目をやつて、まばらな星に、うつとりとながめ入つた。——するとまたひとしきり、腹の子が、身動きをする。彼女は急に耳をすますようにして、その身動きに気をつけた。彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくように、腹の子はまた、人間の苦しみを嘗めに来ようとして、もがいている。が、阿濃は、そんな事は考えない。ただ、母になるという喜びだけが、そうして、また、自分も母になれるという喜びだけが、この凌霄花のにおいのよう、さつきから彼女の心をいっぱいにしているからである。

そのうちに、彼女はふと、胎児が動くのは、眠れないからではないかと思ひだした。事によると、眠られないあまりに、小さな手や足を動かして、泣いてでもいるのかも知れない。「坊やはいい子だね。おとなしく、ねんねしておいで、今にじき夜が明けるよ。」——

— 彼女は、こう胎児にささやいた。が、腹の中の身動きは、やみそうで、容易にやまない。そのうちに痛みさえ、どうやら少しずつ加わって来る。阿濃は、窓を離れて、その下にうずくまりながら、結び燈台のうす暗い灯にそむいて、腹の中の子を慰めようと、細い声で歌をうたつた。

君をおきて

あだし心を

われ持たばや

なよや、末の松山

波も越えなむや

波も越えなむ

うろ覚えに覚えた歌の声は、灯のゆれるのに従つて、ふるえふるえ、しんとした樓の中に断続した。歌は、次郎が好んでうたう歌である。酔うと、彼は必ず、扇で拍子をとりながら、目をねむつて、何度もこの歌をうたう。沙金はよく、その節回しがおかしいと言つて、手を打つて笑つた。——その歌を、腹の中の子が、喜ばないというはずはない。しかし、その子が、実際次郎の胤たねかどうか、それは、たれも知つているものがない。阿あ

濃自身も、この事だけは、全く口をつぐんでいる。たとえ盜人たちが、意地悪く子の親を問いつめても、彼女は両手を胸に組んだまま、はずかしそうに目を伏せて、いよいよ執拗ねく黙ってしまう。そういう時は、必ず垢あかじみた彼女の顔に女らしい血の色がさして、いつか睫毛まつげにも、涙がたまつて来る。盜人たちは、それを見ると、ますます何かとはやし立てて、腹の子の親さえ知らない、阿呆あほうな彼女をあざわらつた。が、阿濃は胎児が次郎の子だという事を、かたく心の中で信じている。そうして、自分の恋している次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然な事だと信じている。この楼の上で、ひとりさびしく寝るごとに、必ず夢に見るあの次郎が、親でなかつたとしたならば、たれがこの子の親であろう。——阿濃は、この時、歌をうたいながら、遠い所を見るような目をして、蚊に刺されるのも知らずに、うつつながら夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかもまた人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、いたましい夢である。（涙を知らないものの見る事ができる夢ではない。）そこでは、いつさいの悪が、眼底を払つて、消えてしまう。が、人間の悲しみだけは、——空をみたしている月の光のように、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしくおごそかに残つてゐる。……

なよや、末の松山

波も越えなむや

歌の声は、ともし火の光のように、次第に細りながら消えていった。そうして、それと共に、力のない呻吟の声が、暗を誘うごとく、かすかにもれ始めた。阿濃は、歌の半ばで、突然下腹に、鋭い疼痛を感じ出したのである。

相手の用意に裏をかかれた盜人の群れは、裏門を襲つた一隊も、防ぎ矢に射しらまされたのを始めとして、中門を打つて出た侍たちに、やはり手痛い逆撃さかうちをくらわせられた。たかが青侍の腕だけと思ひ悔つていた先手せんての何人かも、算を乱しながら、背を見せる——中でも、臆病おぐびような猪熊いのくまの爺おじは、たれよりも先に逃げかかつたが、どうした拍子か、方角を誤つて、太刀たちのただ中へ、はいるともなく、はいつてしまつた。酒肥さかぶとした体格ほこと言ひ、物々しく鉾をひつさげた様子と言ひ、ひとかど手なみのすぐれたものと、思われでもしたのであらう。侍たちは、彼を見ると、互いに目くばせをかわし

ながら、二人三人、きつさき鋒をそろえたまま、じりじり前後から、つめよせて來た。

「はやるまいぞ。わしはこの殿の家人けにんじや。」

猪熊の爺は、苦しまぎれにあわただしくこう叫んだ。

「うそをつけ。——おのれにたばかれるような阿呆あほうと思うか。——往生ぎわの悪いおやじや。」

侍たちは、口々にののしりながら、早くも太刀たちを打ちかけようとする。もうこうなつては、逃げようとしても逃げられない。猪熊の爺の顔は、とうとう死人しびとのような色になつた。

「何がうそじや。何がうそじやよ。」

彼は、目を大きくして、あたりをしきりに見回しながら、逃げ場はないかと気をあせつた。額には、つめたい汗がわいて来る。手もふるえが止まらない。が、周囲は、どこを見ても、むごたらしい生死の争いが、盜人と侍との間に戦われているばかり、静かな月の下ではあるが、はげしい太刀音と叫喚の声とが、一塊ひとかたまりになつた敵味方の中から、ひつきりなしにあがつて来る。——しよせん逃げられないときどつた彼は、目を相手の上にすえると、たちまち別人のようになつて、上下の歯をむき出しながら、すばやく鉢ほこをかまえて、威丈高いたけだかにののしつた。

「うそをついたがどうしたのじや。阿呆。外道。畜生。さあ来い。」

こう言うことばと共に、鉾の先からは、火花が飛んだ。中でも屈竢な、赤あざのある侍が一人、衆に先んじてかたわらから、無二無三に切つてかかつたのである。が、もとより年をとつた彼が、この侍の相手になるわけはない。まだ十合と刃を合わせないうちに、見る見る、鉾先がしどろになつて、次第にあとへ下がつてゆく。それがやがて小路のまん中まで、切り立てられて來たかと思うと、相手は、大きな声を出して、彼が持つていた鉾の柄を、みごとに半ばから、切り折つた。と、また一太刀、今度は、右の肩先から胸へかけて、袈裟がけに浴びせかける。猪熊の爺は、尻居に倒れて、とび出しそうに大きく目を見ひらいたが、急に恐怖と苦痛とに堪えられなくなつたのであろう、あわてて高這いに這いのきながら声をふるわせて、わめき立てた。

「だまし討ちじや。だまし討ちを、食らわせおつた。助けてくれ。だまし討ちじや。」

赤あざの侍は、その後ろからまた、のび上がつて、血に染んだ太刀をふりかざした。その時もし、どこからか猿のようなものが、走つて来て、帷子の裾を月にひるがえしながら、彼らの中へとびこまなかつたとしたならば、猪熊の爺は、すでに、あえない最後を遂げていたのに相違ない。が、その猿のようなものは、彼と相手との間を押しへだてると、

とつさに小刀さすがをひらめかして、相手の乳の下へ刺し通した。そうして、それとともに、相手の横に払つた太刀たちをあびて、恐ろしい叫び声を出しながら、焼け火箸ひばしでも踏んだように、勢いよくとび上がると、そのまま、向こうの顔へしがみついて、二人いっしょにどうと倒れた。

それから、二人の間には、ほとんど人間とは思われない、猛烈なつかみ合いが、始まつた。打つ。噛かむ。髪をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかつたが、やがて、猿のようなものが、上になると、再び小刀さすががきらりと光つて、組みしかれた男の顔は、痣だけ元のよう赤く残しながら、見ていくうちに、色が変わつた。すると、相手もそのまま、力が抜けたのか、侍の上へ折り重なつて、仰向けにぐたりとなる——その時、始めて月の光にぬれながら、息も絶え絶えにあえいでいる、しわだらけの、墓ひきに似た、猪熊のばばの顔が見えた。

老婆は、肩で息をしながら、侍の死体の上に横たわつて、まだ相手の髪もどどりをとらえた、左の手もゆるめずに、しばらくは苦しそうな呻吟しんぎんの声をつづけていたが、やがて白い目を、ぎよろりと一つ動かすと、干からびたくちびるを、二三度無理に動かして、

「おじいさん。おじいさん。」と、かすかに、しかもなつかしそうに、自分の夫を呼びか

けた。が、たれもこれに答えるものはない。猪熊の爺は、老女の救いを得ると共に、打ち物も何も投げすべて、こけつまろびつ、血にすべりながら、いち早くどこかへ逃げてしまった。そのあとにももちろん、何人かの盗人たちは、小路のそこここに、得物をふるつて、必死の戦いをつづけている。が、それらは皆、この垂死の老婆にとつて、相手の侍と同じような、行路の人に過ぎないのであろう。——猪熊のばばは、次第に細つてゆく声で、何度もなく、夫の名を呼んだ。そうして、そのたびに、答えられないさびしさを、負うている傷の痛みよりも、より鋭く味わわされた。しかも、刻々衰えて行く視力には、次第に周囲の光景が、ぼんやりとかすんで来る。ただ、自分の上にひろがっている大きな夜の空と、その中にかかっている小さな白い月と、それよりほかのものは、何一つはつきりとわからない。

「おじいさん。」

老婆は、血の交じつた唾を、口の中にためながら、ささやくようにこう言うと、それなり恍惚とした、失神の底に、——おそらくは、さめる時のない眠りの底に、昏々として沈んで行つた。

その時である。太郎は、そこを栗毛の裸馬にまたがつて、血にまみれた太刀を、口にく

わえながら、両の手に手綱たづなをとつて、あらしのよう<sup>に</sup>通りすぎた。馬は言うまでもなく、沙金しゃきんが目をつけた、陸奥みちのく出の三才駒さんさいいこまであろう。すでに、盜人たちがちりぢりに、死人びとを残して引き揚げた小路は、月に照らされて、さながら霜を置いたよう<sup>に</sup>うす白い。彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、馬上に頭こうべをめぐらして、後にののしり騒ぐ人々の群れを、誇らかにながめやつた。

それも無理はない。彼は、味方の破れるのを見ると、よしや何物を得なくとも、この馬だけは奪おうと、かたく心に決したのである。そうして、その決心どおり、葛つづらま巻まきの太刀たをふるいふるい、手に立つ侍を切り払つて、单身門ひとりわの中に踏みこむと、苦もなく廄の戸を蹴破けやぶつて、この馬の羈綱はづなを切るより早く、背に飛びのる間まも惜しいよう<sup>に</sup>、さえぎるものをひづめにかけて、いつさんに寛を飛ばした。そのために受けた傷も、もとより数えるいとまはない。水干すいかんの袖はちぎれ、烏帽子えぼしはむなしく紐ひもをとどめて、ずたずたに裂かれた袴はかまも、なまぐさい血潮に染まつてゐる。が、それも、太刀と鉾ほことの林の中から、一人に会えば一人を切り、二人に会えば二人を切つて、出て來た時の事を思えば、うれしくこそあれ、惜しくはない。——彼は、後ろを見返り見返り、晴れ晴れした微笑を、口角に漂わせながら、昂然こうぜんとして、馬を駆つた。

彼の念頭には、沙金がある。と同時にまた、次郎もある。彼は、みずから欺く弱さをしきりながら、しかもなお沙金しゃきんの心が再び彼に傾く日を、夢のように胸に描いた。自分ではかつたなら、たれがこの馬をこの場合、奪う事ができるだろう。向こうには、人の和があつた。しかも地の利さえ占めている。もし次郎だつたとしたならば——彼の想像には、一瞬の間あいだ、侍たちの太刀たちの下に、切り伏せられている弟の姿が、浮かんだ。これは、もちろん、彼にとつて、少しも不快な想像ではない。いやむしろ彼の中にあるある物は、その事実である事を、祈りさえした。自分の手を下さずに、次郎を殺す事ができるなら、それはひとり彼の良心を苦しめずにするばかりではない。結果から言えば、沙金がそのために、自分を憎む恐れもなくなつてしまふ。そう思いながらも、彼は、さすがに自分の卑怯ひきょうを恥じた。そうして口にくわえた太刀を、右手にとつて、おもむろに血をぬぐつた。

そのぬぐつた太刀を、ちょうど鞘さやにおさめた時である。おりから辻つじを曲がつた彼は、行く手の月の中に、二十と言わず三十と言わず、群がる犬の数を尽くして、びようびようとほえ立てる声を聞いた。しかも、その中にただ一人、太刀をかざした人の姿が、くずれかかつた築土ついじを背負つて、おぼろげながら黒く見える。と思う間に、馬は、高きいななきながら、長い鬚たてがみをさつと振るうと、四つの蹄ひづめに砂煙をまき上げて、またたく間に太郎をそこ

へ疾風のように持つて行つた。

「次郎か。」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、険しく眉をひそめて、弟を見た。次郎も片手に太刀をかざしながら、項をそらせて、兄を見た。そうして刹那に二人とも、相手の瞳の奥にひそんでいる、恐ろしいものを感じ合つた。が、それは、文字どおり刹那である。馬は、吠えたける犬の群れに、脅かされたせいであろう、首を空ざまにつとあげると、前足で大きな輪をかきながら、前よりもすみやかに、空へ跳つた。あとには、ただ、濛々としたほこりが、夜空に白く、ひとしきり柱になつて、舞い上がる。次郎は、依然として、野犬の群れの中に、傷をこうむつたまま、立ちすくんだ。……

太郎は——一時に、色を失つた太郎の顔には、もうさつきの微笑の影はない。彼の心中では、何ものかが、「走れ、走れ」とささやいている。ただ、一時、ただ、半時、走りさえすれば、それで万事が休してしまう。彼のする事を、いつかしなくてはならない事を、犬が代わつてしてくれるのである。

「走れ、なぜ走らない?」ささやきは、耳を離れない。そうだ。どうせいつかしなくてはならない事である。おそいと早いとの相違がなんであろう。もし弟と自分の位置を換えた

にしても、やはり弟は自分のしようとする事をするに違いない。「走れ。羅生門<sup>らしうもん</sup>は遠くはない。」太郎は、片目に熱を病んだような光を帶びて、半ば無意識に、馬の腹を蹴<sup>け</sup>つた。

馬は、尾と鬚<sup>たてがみ</sup>とを、長く風になびかせながら、ひづめに火花を散らして、まつしぐらに狂奔する。一町二町月明かりの小路は、太郎の足の下で、急湍<sup>きゆうたん</sup>のように後ろへ流れた。

するとたちまちまた、彼のくちびるをついて、なつかしいことばが、あふれて來た。

「弟」である。肉身の、忘れる事のできない「弟」である。太郎は、かたく手綱<sup>たづな</sup>を握つたまま、血相を変えて歯がみをした。このことばの前には、いつさいの分別が眼底を払つて、消えてしまう。弟か沙金<sup>しゃきん</sup>かの、選択をしいられたわけではない。直下<sup>じきげ</sup>にこのことばが電光のごとく彼の心を打つたのである。彼は空も見なかつた。道も見なかつた。月はなおさら目にはいらなかつた。ただ見たのは、限りない夜である。夜に似た愛憎の深みである。太郎は、狂気のごとく、弟の名を口外に投げると、身をのけざまに翻して、片手の手綱<sup>たづな</sup>を、ぐいと引いた。見る見る、馬の頭<sup>かしら</sup>が、向きを変える。と、また雪のような泡<sup>あわ</sup>が、栗毛の口にあふれて、蹄<sup>ひづめ</sup>は、碎けよとばかり、大地を打つた。——一瞬ののち、太郎は、慘として暗くなつた顔に、片目を火のごとくかがやかせながら、再び、もと来たほうへまつしぐらに汗馬<sup>かんば</sup>を跳<sup>おど</sup>らせていたのである。

「次郎。」

近づくままに、彼はこう叫んだ。心の中に吹きすさぶ感情のあらしが、このことばを機会として、一時に外へあふれたのであろう。その声は、白燃鉄<sup>はくねんてつ</sup>を打つような響きを帶びて、鋭く次郎の耳を貫ぬいた。

次郎は、きっと馬上の兄を見た。それは日ごろ見る兄ではない。いや、今しがた馬を飛ばせて、いつさんに走り去つた兄とさえ、変わつてゐる。険しくせまつた眉<sup>まゆ</sup>に、かたく、下くちびるをかんだ歯に、そうしてまた、怪しく熱している片目に、次郎は、ほとんど憎悪に近い愛が、——今まで知らなかつた、不思議な愛が燃え立つてゐるのを見たのである。

「早く乗れ。次郎。」

太郎は、群がる犬の中に、隕石<sup>いんせき</sup>のような勢いで、馬を乗り入れると、小路を斜めに輪乗りをしながら、叱咤<sup>しつた</sup>するような声で、こう言つた。もとより躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>に、時を移すべき場合ではない。次郎は、やにわに持つていた太刀<sup>たち</sup>を、できるだけ遠くへほうり投げると、そのあとを追つて、頭をめぐらす野犬のすきをうかがつて、身軽く馬の平首へおどりついた。太郎もまたその刹那<sup>せつな</sup>に猿臂<sup>えんび</sup>をのばし、弟の襟<sup>えり</sup>上<sup>がみ</sup>をつかみながら、必死になつて引きずり上げる。——馬の頭<sup>かしら</sup>が、たてがみに月の光を払つて、三たび向きを変えた時、次郎はすでに

馬背にあつて、ひしと兄の胸をいだいていた。

と、たちまち一頭、血みどろの口をした黒犬が、すさまじくうなりながら、砂を巻いて鞍壺くらつぼへ飛びあがつた。とがつた牙が、危うく次郎のひざへかかる。そのとたんに、太郎は、足をあげて、したたか栗毛くりげの腹を蹴けつた。馬は、一声いななきながら、早くも尾を宙に振るう。——その尾の先をかすめながら、犬は、むなしく次郎の脛布はばきを食いちぎつて、うずまく獣の波の中へ、まつさかさまに落ちて行つた。

が、次郎は、それをうつくしい夢のように、うつとりした目でながめていた。彼の目には、天も見えなければ、地も見えない。ただ、彼をいだいている兄の顔が、——半面に月の光をあびて、じつと行く手を見つめている兄の顔が、やさしく、おごそかに映つてゐる。彼は、限りない安息が、おもむろに心を満たして来るのを感じた。母のひざを離れてから、何年にも感じた事のない、静かな、しかも力強い安息である。——

「にいさん。」

馬上にある事も忘れたようすに、次郎はその時、しかと兄をいだくと、うれしそうに微笑しながら、頬を紺の水干すいかんの胸にあてて、はらはらと涙を落としたのである。

半時はんときののち、人通りのない朱雀すざくの大路おおじを、二人は静かに馬を進めて行つた。兄も黙つ

ていれば、弟も口をきかない。しんとした夜は、ただ馬蹄の響きにこだまをかえして、二人の上の空には涼しい天の川がかかっている。

## 八

羅生門の夜は、まだ明けない。下から見ると、つめたく露を置いた壇や、丹塗りのはげた欄干に、傾きかかつた月の光が、いざよいながら、残つてゐる。が、その門の下は、斜めにつき出した高い檐に、月も風もさえぎられて、むし暑い暗がりが、絶えまなく藪蚊に刺されながら、酸えたようによどんでいる。藤判官の屋敷から、引き揚げてきた偷盜の一群は、そのやみの中にかすかな松明の火をめぐりながら、三々五々、あるいは立ちあるいは伏し、あるいは丸柱の根がたにうずくまつて、さつきから、それぞれけがの手當てに忙しい。

中でも、いちばん重手を負つたのは、猪熊の爺である。彼は、沙金の古い桂を敷いた上に、あおむけに横たわつて、半ば目をつぶりながら、時々ものにおびえるように、しわがれた声で、うめいてゐる。一時の間、ここにこうしてゐるのか、それとも一年も前か

ら同じように寝て いるのか、彼の 困憊した心には、それさえ時々はわからない。目の前には、さまざま な幻が、瀕死の彼をあざけるように、ひつきりなく徂來すると、その幻と、現在門の下で起こつて いる出来事とが、彼にとつては、いつか全く同一な世界になつてしまふ。彼は、時と所とを分かたない、昏迷の底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越したある順序で、まざまざと再び、生活した。

「やい、おばば、おばばはどうした。おばば。」

彼は、暗から生ま れて、暗へ消えてゆく恐ろしい幻に脅かされて、身をもだえながら、こううなつた。すると、かたわらから額の傷を汗衫の袖で包んだ、交野の平六が顔を出して、

「おばばか。おばばはもう十万億土へ行つてしも うた。おおかた蓮の上 でな、おぬしの来るのを、待ち焦がれて いる事じやろう。」

言ひすてて、自分の冗談を、自分でからからと笑いながら、向こうのすみに、眞木島の十郎の腿のけがの手当をして いる、沙金のほうをふり返つて、声をかけた。

「お頭、おじじはちとむずかしいようじや。苦しめるだけ、殺生じやて。わしがどどめを刺してやろうかと思うがな。」

沙金は、あでやかな声で、笑つた。

「冗談じやないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」

「なるほどな、それもそうじや。」

猪熊の爺は、この問答を聞くと、ある予期と恐怖とに襲われて、からだじゅうが一時に凍るような心もちがした。そうして、また大きな声でうなつた。平六と同じような理由で、敵には臆病な彼も、今までに何度、致死期の仲間の者をその鉾の先で、とどめを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すという、ただそれだけの目的から、あるいは自分の勇気を人にも自分にも示そうとする、ただそれだけの興味から、あるいはなしわざをあえてした。それが今は――

と、たれか、彼の苦しみも知らないように、灯の陰で一人、鼻歌をうたう者がある。

いたち笛ふき

猿かなず

いなごまろは拍子うつ

きりぎりす

ぴしやりと、蚊をたたく音が、それに次いで聞こえる。中には「ほう、やれ」と拍子を

とつたものもあつた。二三人が、肩をゆすつたけはいで、息のつまつたような笑い声を立てる。——猪熊の爺は、いのくまおじ 総身をわなわなふるわせながら、まだ生きているという事実を確かめたいために、重い眶を開いて、じつとともし火の光を見た。灯は、その炎のまわりに無数の輪をかけながら、執拗しううね い夜に攻められて、心細い光を放つてゐる。と、小さな黄金虫こがねむし が一匹ぶうんと音を立てて、飛んで来て、その光の輪にはいつたかと思うとたちまち羽根を焼かれて、下へ落ちた。青臭いにおいが、ひとしきり鼻を打つ。

あの虫のように、自分もほどなく死ななければならぬ。死ねば、どうせ蛆うじ と蠅はえ とに、血も肉も食いつくされるからだである。ああこの自分が死ぬ。それを、仲間のものは、歌をうたつたり笑つたりしながら、何事もないよう騒いでいる。そう思うと、猪熊の爺は、名状しがたい怒りと苦痛とに、骨髓をかまれるような心もちがした。そうして、それとともに、なんだか轆轤ろくろ のようにとめどなく回つてゐる物が、火花を飛ばしながら目の前へおりて来るような心もちがした。

「畜生。人でなし。太郎。やい。極道。」

まわらない舌の先から、おのずからこういうことばが、とぎれとぎれに落ちて来る。——真木島まきのしま の十郎は、腿もも の傷が痛まないよう、そつとねがえりをうちながら、喉のど のかわ

いたような声で、沙金にささやいた。

「太郎さんは、よくよく憎まれたものさな。」

沙金は、眉をひそめながら、ちよいと猪熊の爺のほうを見て、うなずいた。すると

鼻歌をうたつたのと同じ声で、

「太郎さんはどうした。」とたずねたものがある。

「まず助かるまいな。」

「死んだのを見たと言うたのは、たれじや。」

「わしは、五六人を相手に切り合っているのを見た。」

「やれやれ、頓生菩提、頓生菩提。」

「次郎さんも、見えないぞ。」

「これも事によると、同じくじや。」

太郎も死んだ。おばばも、もう生きてはいない。自分も、すぐに死ぬであろう。死ぬ。

死ぬとは、なんだ。なんにしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。虫のように、なんの  
造作もなく死んでしまう。——こんな取りとめのない考えが、暗の中に鳴いている蚊の  
やぶかの

ように、四方八方から、意地悪く心を刺して来る。猪熊の爺は、形のない、気味の悪い

「死」が、しんぼうづよく、丹塗りの柱の向こうに、じつと自分の息をうかがつてゐるのを感じた。残酷に、しかもまた落ち着いて、自分の苦痛をながめているのを感じた。そして、それが少しずつ居ざりながら、消えてゆく月の光のように、次第にまくらもとへすりよつて来るのを感じた。なんにしても、自分は死にたくない。――

夜はたれとか寝む

ひたち 常陸の介と寝む

いね 寝たる肌もよし

男山の峰のもみじ葉

さぞ名はたつや

また、鼻歌の声が、油しめ木の音のような呻吟の声と一つになつた。とたれか、猪の爺の枕もとで、つばをはきながら、こう言つたものがある。

阿濃のあほうが見えぬの。」

「なるほど、そうじや。」

「おおかた、この上に寝ておろう。」

「や、上で猫が鳴くぞ。」

みな、一時にひつそりとなつた。その中を、絶え絶えにつづく猪熊の爺のうなり声と一つになつて、かすかに猫の声が聞こえて来る。と流れ風が、始めてなま暖かく、柱の間を吹いて、うす甘い凌霄花のにおいが、どこからかそつと一同の鼻を襲つた。

「猫も化けるそうな。」

「阿濃の相手には、猫の化けた、老いぼれが相当じやよ。」

すると、沙金が、衣ずれの音をさせて、たしなめるように、こう言った。

「猫じやないよ。ちよつとたれか行つて、見て来ておくれ。」

声に応じて、交野の平六が、太刀の鞘を、柱にぶつつけながら、立ち上がつた。楼上に通う梯子は、二十いくつの段をきざんで、その柱の向こうにかかつてゐる。——一同は、理由のない不安に襲われて、しばらくはたれも口をとざしてしまつた。その間をただ、凌霄花のにおいのする風が、またしてもかすかに、通りぬけると、たちまち楼上で平六の、何か、わめく声がした。そうして、ほどなく急いで梯子をおりて来る足音が、あわただしく、重苦しい暗をかき乱した。——ただ事ではない。

「どうじや。阿濃めが、子を産みおつたわ。」

平六は、梯子をおりると、古被衣にくるんだ、丸々としたものを、勢いよくともし火

の下へ出して見せた。女の臭いのする、うすよごれた布の中には、生まれたばかりの赤ん坊が、人間というよりは、むしろ皮をむいた蛙のように、大きな頭を重そうに動かしながら、醜い顔をしかめて、泣き立てている。うすい産毛といい、細い手の指と言い、何一つ、嫌悪と好奇心とを、同時にそそらないものはない。——平六は、左右を見まわしながら、抱いている赤子を、ふり動かして、得意らしく、しゃべり立てた。

「上へ上がつて見ると、阿濃め、窓の下へつつ伏したなり、死んだようになつて、うなつていると、阿呆とはいえ、女の部じや。癩かと思うて、そばへ行くと、いや驚くまい事か。さかなの腸をぶちまけたようなものが、うす暗い中で、泣いているわ。手をやると、それがぴくりと動いた。毛のないところを見れば、猫でもあるまい。じやてひつつかんで、月明かりにかざして見ると、このどおり生まれたばかりの赤子じや。見い。蚊に食われたと見えて、胸も腹も赤まだらになつてているわ。阿濃も、これからはおふくろじやよ。」

松明の火を前に立つた、平六のまわりを囲んで、十五六人の盜人は、立つものは立ち、伏すものは伏して、いずれも皆、首をのばしながら、別人のように、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊を見守つた。赤ん坊は、しばらくも、じつとしていない。手を動かす。足を動かす。しまいには、頭を後ろへそらせて、ひとしきり

また、けたたましく泣き立てた。と、歯のない口の中が見える。

「やあ舌がある。」

前に鼻歌をうたつた男が、頓狂な声で、こう言つた。それにつれて、一同が、傷も忘れたように、どつと笑う。——その笑い声のあとを追いかけるように、この時、突然、猪熊の爺が、どこにそれだけの力が残つていたかと思うような声で、険しく一同の後ろから、声をかけた。

「その子を見せてくれ。よ。その子を。見せないか。やい、極道。」

平六は、足で彼の頭をこづいた。そうして、おどかすような調子で、こう言つた。

「見たければ、見るさ。極道とは、おぬしの事じや。」

猪熊の爺は、濁つた目を大きく見開いて、平六が身をかがめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食いつきそうな様子をして、じつと見た。見ているうちに、顔の色が、次第に蟬のとく青ざめて、しわだらけの眸に、涙が玉になりながら、たまつて来る。と思うと、ふるえるくちびるのほどりには、不思議な微笑の波が漂つて、今までにない無邪気な表情が、いつか顔じゅうの筋肉を柔らげた。しかも、饒舌な彼が、そうなつたまま、口をきかない。一同は、「死」がついに、この老人を捕えたのを知つた。しかし彼の微笑

の意味はたれも知つてゐるものがない。

猪熊の爺は、寝たまま、おもむろに手をのべて、そつと赤ん坊の指に触れた。と、赤ん坊は、針にでも刺されたように、たちまちいたいたしい泣き声を上げる。平六は、彼をしからうとして、そうしてまた、やめた。老人の顔が——血のけを失つた、この酒肥りの老人の顔が、その時ばかりは、平生どちがつた、犯しがたいいかめしさに、かがやいているような気がしたからである。その前には、沙金でさえ、あたかも何物かを待ち受けるように、息を凝らしながら、養父の顔を、——そうしてまた情人の顔を、目もはなさず見つめている。が、彼はまだ、口を開かない。ただ、彼の顔には、秘密な喜びが、おりから吹きだした明け近い風のように、静かに、ここちよく、あふれて来る。彼は、この時、暗い夜の向こうに、——人間の目どどかない、遠くの空に、さびしく、冷ややかに明けてゆく、不滅な、黎明を見たのである。

「この子は——この子は、わしの子じや。」

彼は、はつきりこう言つて、それから、もう一度赤ん坊の指にふれると、その手が力なく、落ちそうになる。——それを、沙金が、かたわらからそつとささえた。十余人の盗人たち、このことばを聞かないように、いづれも睡をのんで、身動きもしない。と、沙

金が顔を上げて、赤子を抱いたまま、立っている交野の平六の顔を見て、うなずいた。

「啖がつまる音じや。」

平六は、たれに言うともなく、つぶやいた。——猪熊の爺は、暗におびえて泣く赤子の声の中に、かすかな苦悶をつづけながら、消えかかる松明の火のように、静かに息をひきとつたのである。……

「爺も、とうとう死んだの。」

「さればさ。阿濃を手ごめにした主も、これで知れたと言うものじや。」

「死骸は、あの藪中へ埋めずばなるまい。」

「鴉の餌食にするのも、気の毒じやな。」

盜人たちは、口々にこんな事を、うす寒そうに、話し合つた。と、遠くで、かすかに、鶴の声がする。いつか夜の明けるのも、近づいたらしい。

「阿濃は?」と沙金が言つた。

「わしが、あり合わせの衣をかけて、寝かせて來た。あのからだじやて、大事はあるまい

。」

平六の答えも、曰ごろに似ずものやさしい。

そのうちに、盜人が二人三人、猪熊の爺の死骸を、門の外へ運び出した。外も、まだ暗い。有明の月のうすい光に、蕭条とした藪が、かすかにこずえをそよめかせて、凌霄花のにおいが、いよいよ濃く、甘く漂つてゐる。時々かすかな音のするのは、竹の葉をすべる露であろう。

「生死事大。」

「無常迅速。」

「生き顔より、死に顔のほうがよいようじやな。」

「どうやら、前よりも真人間らしい顔になつた。」

猪熊の爺の死骸は、斑々たる血痕に染まりながら、こういうことばのうちに、竹と凌霄花との茂みを、次第に奥深く昇かれて行つた。

九

翌日、猪熊のある家で、むごたらしく殺された女の死骸が発見された。年の若い、肥つた、うつくしい女で、傷の様子では、よほどはげしく抵抗したものらしい。証拠ともなる

べきものは、その死骸しがいが口にくわえていた、朽ち葉色の水干の袖ばかりである。

また、不思議な事には、その家の婢女みずしをしていた阿濃あこぎという女は、同じ所にいながら、薄手一つ負わなかつた。この女が、検非違使けいびいしちょうで、調べられたところによると、だいたいこんな事があつたらしい。だいたいと言うのは、阿濃が天性白痴に近いところから、それ以上要領を得る事が、むずかしかつたからである。――

その夜、阿濃は、夜ふけて、ふと目をさますと、太郎次郎という兄弟のものと、沙金しゃきん刀ちやいばをぬいて、沙金を切つた。沙金は助けを呼びながら、逃げようとするが、今度は太郎が、刃やいばを加えたらしい。それからしばらくは、ただ、二人のののしる声と、沙金の苦しむ声とがつづいたが、やがて女の息がとまるが、兄弟は、急にいだきあつて、長い間黙つて、泣いていた。阿濃は、これを遣り戸やどのすきまから、のぞいていたが、主人を救わなかつたのは、全く抱いて寝ている子供に、けがをさすまいと思つたからである。――

「その上、その次郎さんと申しますのが、この子の親なのでござります。」

阿濃は、急に顔を赤らめて、こう言つた。

「それから、太郎さんと次郎さんは、わたしの所へ来て、たつしやでいろよと申しまし

た。この子を見せましたら、次郎さんは、笑いながら、頭をなでてくれましたが、それでもまだ目には涙がいっぱいいたまつておりましたつけ。わたしはもつとそうしていたかつたのでござりますが、二人とも、たいへんに急いで、すぐに外へ出ますと、おおかた枇杷の木にでもつないでおいたのでございましょう、馬へとびのつて、どこかへ行つてしましました。馬は二匹ではございません。わたしが、この子を抱いて、窓から見ておりますと、一匹に二人で乗つて行くのが、月がございましたから、よく見えました。そのあとで、わたしは、主人の死骸はそのままにして、そつとまた床へはいりました。主人がよく人を殺すのを見ましたから、その死骸もわたしには、こわくもなんともなかつたのでございます。

「けびいし檢非違使には、やつとこれだけの事がわかつた。そうして、阿濃は、罪の無いのが明らかになつたので、さつそく自由の身にされた。

それから、十年余りのち、尼になつて、子供を養育していた阿濃は、丹後守何某の隨身に、驍勇きょうゆうの名の高い男の通るのを見て、あれば太郎だと人に教えた事がある。なるほどその男も、うす痘瘡いもで、しかも片目つぶれていた。

「次郎さんなら、わたしすぐにも駆けて行つて、会うのだけれど、あの人はこわいから…

⋮

阿濃<sup>あこぎ</sup>は、娘のようなしなをして、こう言つた。が、それがほんとうに太郎かどうか、それはたれにも、わからぬ。ただ、その男にも弟があつて、やはり同じ主人に仕えるといふ事だけ、そののちかすかに風聞された。

（大正六年四月二十日）

## 青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥・偷盜」岩波文庫、岩波書店

1960（昭和35）年11月25日第1刷発行

1993（平成5）年9月20日第46刷発行

底本の親本：「芥川竜之介全集」岩波書店

1954（昭和29）年～1955（昭和30）年

初出：「中央公論」

1917（大正6）年4～7月

入力：福田芽久美

校正：野口英司

1998年10月4日公開

2007年9月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）に作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 偷盜

## 芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>